
天元突破グレンラガン番外編 第5．55話「前を向いて生きやがれ！」

納 平子

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天元突破グレンラガン番外編 第5・55話「前を向いて生きやがれ！」

【Nコード】

N5779F

【あらすじ】

アダイ村を出て幾日か 。仲間と離れ、生き倒れ間近な不撓不屈の鬼リーダー・カミナは、獣人に追われる一人の少年と出会う。少年を助けたカミナは彼の住む村へと招待されるが……。天元突破グレンラガンで人気の高いアニキを主役に据えた物語です。作者視点で描かれたカミナの生き様を、どうぞご覧ください。

始まりやがれー（前書き）

始まるやがれー！！

始まりやがれ！

これは、天も次元も^{突破}する、荒唐無稽の規格外、しかし、誰よりも熱く燃えた^火魂^{ソウル}を宿した、通称穴掘りシモン、

：の、兄貴分である不撓不屈の鬼リーダー・カミナの、壮絶にして壯觀なる物語を綴つたものである。

第5・55話 前を向いて生きやがれ！

何処を向いても見渡す限り、砂礫が覆う荒野の世界。

草木もろくに生えない過酷な土地で、人っ子一人見当たらない侘しい場所で、

「……だーれもいねえ」

その男、カミナは存在した。

無機質な荒野には似合わない巨大な顔に手足を付けた人型の機械

通常“ガンメン”、機体名『グレン』の頭部に、腰をどつかり下ろして腕を組む。日光を反射するグラサンと、グレンの紅いボディが少々眩しい。

彼は獣人討伐隊『グレン団』のリーダーである。

獣人とは、地上を支配する生き物で、人と獣が合わさったかのような容姿を持つ。彼らは、地下世界で暮らす人間達が地上へ出でくると、ガンメンに乗つて『狩り』をする。

地上に憧れ、地下を這い出してきたカミナとその弟分シモンも、例外なく、獣人達の手荒い歓迎を受けた。

だが、カミナはやられっぱなしで引き下がるような男ではない。敵

獣人の乗るガンメンを無理矢理奪つて、我が物にしてしまう。

そして敵の本拠地を知った彼は、故郷のジーハ村で不良集団だったグレン団を獣人討伐隊と改め、攻められるだけの現状を打破しようと敵地へ攻め込む旅へ出たのだった。

旅立つたのだ。

旅をしていた、のだが。

「…………誰も、いねえ」

彼は現在、独りぼっち。

荒野の中心で孤独を呟き、グレンの仲間の姿は影も形もない。

亡き父の形見である、燃え上がる炎とサングラスを掛けたドクロが印象的な柄のマントも、心なしかくすぶり気味。青色の髪と共に、風に吹かれてなびいている。

そう、单刀直入に言つならば、カミナは迷子に、

「あじつひひーー！」行きやがつたんだ。つたく、揃いも揃つて迷子たあ情けねえ！」

……彼は、迷子二、

「ちよつとばかし用を足しに行つて戻つて来てみりや、誰もいないんだからよ。しつかりしろつてんだよなあ」

……彼“が”、迷

「良い歳こいてばぐれるたあよ、やつば俺様がついてなきやあ駄目だな！……迷子のー、迷子のオ仔猫ひやん。あなたのお家はー、何処ですかあーつと

……。

……彼は、迷子になつた仲間達を、捜してゐる、途中でした（棒読み）。

そんなこんなで。

照りつける陽射しもなんのその、カミナは失踪した仲間達を捜すべく、荒野をさ迷つていましたとさ。

完。

始まりやがれ！（後書き）

終わつちまつのか？！

「わがせさせられーー（前書き）

！ トトロアリマリナリ！

喰わせやがれ！

「はい、始まつて数分足らずで終わつてしまひましたが、如何だつたでしょうか？」

「短いですね。短いです。アノ方も立腹ですよ。」

「オウオウ！ 男の生き様語るやいなや、いきなり終わるたあ何事だ？！ いいか、俺様の武勇伝はまだまだこれからだあ！ 良いから曰んたまかつぽじつて、よおーく見届けやがれ！！」

だ、そうです。

このままだと収まりがつかそうがないので、もうじまいへお付を合
い下さいます。

そんなこんなで。

故郷の村で悪名を轟かせていた（と豪語する）カミナは、仲間達を

捗して荒野をさ迷つこと一時間。

「…………腹、減つた」

飢えで、半ば死にかけていた。

グレンは硬い地にひれ伏して、コックピットから這い出たカミナも同様に倒れてしまつ。

人間腹が減つてゐる、氣合いも入らなくなるものだ。視界がボヤけていく中、カミナの胸中には走馬灯のように、過去の出来事が思い起こされていた。

故郷、ジーハ村でブタモグラに乗り、悪人シャク村長を撃退して英雄ともてはやされた栄光の日々…（嘘）。

天井から現れたガンメン・ゴズーと美少女ナイパー・ヨーロとの出逢い、弟分シモンとヨーロの三人+ブータの一匹でゴズーを撃破、そのまま地上へ出た時の感動……。

獣だか人だか判らない獣人からガンメンを奪い、戦いに勝ち意気揚々としながらも、直後に父親がすでに死んでいたことを知った時の哀しみ……。

人か獣か曖昧野郎との決闘、決戦を経て、シモンの乗るガンメン・ラガンとグレンが合体、顔が二つに増えた時の満足感……（？）。

黒の兄弟との遭遇、顔十六のガンメンを目にし、その顔の多
さに正直羨んだ、あの悔しや…………（？？）。

ガンメンを神として崇め、村の人口が五十を過ぎるとクジで
村人を間引いていた、アダイ村の村長マギンのあのアゴの「力さ…
…………（？？？）。

「あ
…

嗚呼…………、素晴らしい人生……。天上天下唯我独尊の鬼り
——ダ——・カミナの生涯に、もはや一片の悔いもなし…………。

「…ん？」

あばよ、シモン……俺はもう駄目だ……、せめてお前だけでも、天を衝いて、衝いて、衝きまくつてくれ……。

「んー？」

嗚呼、だけどよ……心残りがあるとすれば、そりゃあの時食った肉の味……結局、あの後シモンの奴食わせてくれなかつたからなあ……チクショウ、腹ア減つたぜ……また、あの肉を、味わいたかつた、な……。

「…………あ

俺は、もつ……逝、くぜ……、

。

「…………あア

ツツツ――!?

え？

「肉……肉だ……肉が走ってるぞオ

ツ！・！

あの、ちよつと、もしもし?

ちょっと待つて走らないで、何処行くの！？

あ、駄目だ。空腹で我を忘れてる。あー……、じゃあ、ね。とにかく

く、場の状況説明しよか。

え……走馬灯が見え、瀕死寸前だったカミナの目に、高速で移動する二つの影が写った。それは一方がもう一方を追い掛けているようにも見

「がつぶウウウウウウウウ！」

「ギジヤア
？！？」

だからちょっと待てって！！ 一体何に噛みついたの？！ 少しは落ち着けよッ、節操ねえなあおい！！！

「ガウガウガウガウガウガウガウガウガウツツツ

「イだだだだだ？！？ 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い、イー
ツターツイーツツツツツツツツツ！」

……。簡単に、言つて、

飢えきつたカミナは通り掛かった蛇のよつた生き物に噛みつき欲望のままにむしゃぶりこむ。蛇のよつた生き物は痛そうだとぞそんなの関係ねえともしゃぶり。蛇のよつた生き物は全身歯形だらけで結構痛そうでもカミナはもうやめないやめられない止まらない。

蛇のよつた生き物の断末魔だけが、虚しく荒野に残響しましたとさ。

「……シャ　　ツー！　何なんシャア、お前はーー！」

拘束され、滅茶苦茶に貪られる蛇のよつた生き物は激怒して叫ぶ。

するとかミナは、

「オウオウオウオウーー！　迷子を捜して二千里、食い物見つけてお

おはしゃぎい！ 腹が減つては戦はできぬウ！？ 嘰わなきや野垂
れて死んじまわあ！！ 絶命寸前の力ミナ様たあ、俺のことだあ！
！…」

「絶命寸前つて、とてもそんな風には見えないつシャ

ツ

「頂きます」

カプツ。

o

『食事』は、程なくして終わりを迎えた。

獲物が命からがら逃げ出しだので。

「だあチクショオイ!! 何処行きやがつた俺の肉ウー?」

食い意地の張つた力ミナは地団駄を踏んでそこいらを見渡すが、蛇のよつな生き物の姿はもう何処にもない。

見事に獲物を逃したことで完全脱力、地べたにヘタリと座り込んでしまう。

「くう。俺の、肉……」

「…」

へたれて動かないカミナは、一向に氣づく氣配がない。

高速で移動していた影は“一いつ”あつたことを。

蛇のような生き物の他に、もう一人この場にいたことを。

「…あの」

「んあ？」

声がして。

うつむいた顔を上げると、そこには一人の少年が立っていた。

蛇のような生き物に追われ、カミナの奇想天外行動で助かった、少年。

背は低く、やつれ、ボロ布のような黒色の服を着た、白髪の、少年。

生氣のない目で自分を見下ろす少年に、カミナは、逆から差す陽の光で陰った顔を、まじまじと見つめて、

その少年が人間であることを、その目でしっかりと確かめて、

力強さを取り戻した声で、

一言。

「俺の、肉……！」

違つて。

…。

「…シャ～、酷い目にあつたシャア」

カミナと少年がいる場所から程遠い位置にある、岩場の物影。

そこに身を隠し、餓えたケダモノが追つてこないかしきりに確認してびくついている、蛇の獣人ダシャーがいた。

「痛ウ〜……容赦なく噛みつきやがって、人間め〜。次に会つたらただじやおかないつシャーー」

憎々しげに呟く。

のだが、それは言つもの、ダシャーの顔からは恐怖の色が消えていない。単なる虚勢のようだった。

食肉として見られ、本気で喰われかけたせいか若干トラウマになりつつ、何度も何度も来た道を確認して、

凶悪な人間・カミナは追つてこないと判断。ひとまずは安心し、近場に置いてきたガンメンに戻つて出直そと近場から動く。

「 しつかし……

少し歩いて。

「 直に捕まえてみようと思つたけビシャア、結局失敗したし、またいつも通り攻めようかシャ～」

歯形の傷を労りながらダシャーはほやぐ。カミナが割り込んでくる前、捕まえようとした少年を思に出して、

ぶるりと、

身震いする。

「薄意味悪いつたらないシャー。 の人間も、あの村も、これで終
わりにしたいシャー……」

喰わせやがれ！（後書き）

喰えなかつた……。

あれがめつだあー？（前書き）

忘れるかよー

忘れちまつだあ！？

蒼穹際立つ、だだつ広い黄土色の世界の真ん中。

そこに立ち往生して動かない、とある一団の姿がある。

「… アニキ、見つからないね」

人一人分乗れる程度の小柄なガンメン・ラガンに乗つて、仰向けで空を見上げるドングリ目の少年シモンは、疲れたように溜め息をついて、

「見つからないわね、あの馬鹿は」

隣で背中を預ける少女、赤髪のポーテールにナイスバディな身体のヨーロは、神妙な表情で口を尖らせ、

「はぐれてからもう一時間以上経ちます。辺り一帯を捜し回って見つからないとなると、最悪、もう出会えない可能性も…」

さらには、難しい顔のデコ助ロシウは、現実的に悲観的で、

「まい」「…」「！」

「まい」「…？」

倒したガンメンを元に造られた移動式司令部兼住居・グレンハウス、その屋根の上ではしゃぐギミーと首を傾げるダリーの双子は、状況を一切把握せず、

「大丈夫じゃない？ カミナのことだし、野生の勘とかですぐ合流してくるわよ…」

オカマで変態なメカニック・リーロンは、ハウスの窓辺に腰掛け、上の空で機械を弄つて、

総じて、獣人討伐隊『グレン団』の面々だった。

……『言つまでもないが、けつして迷子は彼らの方ではない。事実無根である。

で、実際に迷子になつてゐるカミナを捜す一向なのだが。

「野生の勘、ね。ただの行き当たりばつたりのよつたな氣もするけど」

ヨーロの言葉は辛辣で、ラガン上のシモンもうんうん頷く。自分達のリーダーが行方不明なのにも関わらず、あまり心配はしていない様子。

薄情にも見える光景だが、それは言い換えれば、カミナに対する信頼が大変厚いことを示している訳で。

グレン団に合流して日が浅く、実直なロシウだけが彼の身を案じていた。

「敵に襲われているかも知れませんし、動けなくなっているかも知れない。やっぱり、一刻も早く見つけないと…」

なんて意見を出しても、

「大丈夫だよ。アニキはそんなやわじやないから」

「殺したつてまず死ないわよ」

といつよつと返しがあるだけ。

……投げやりな感が否めないのは、気のせいです。

「不幸中の幸いだったのは、グレンも一緒にいなくなつたってところねー。敵ガンメンに遭遇しても、カミナなら上手く戦い仰せるわよ～…」

熱心に機械を操作するワーロンもこの楽天ぶり。

不服ながら、一人だけ騒いでも仕方ないので、ロシウは引き下がることとなる。

なので、カミナとは後で合流出来るとして、その間グレン団はどうするか、という話題になり、

そんな折、グレンハウスからもう一人の（否、一匹の）仲間がある物を持って飛び出してきたので皆注目。

その仲間はラガンコックピットのシモンの懐へ勢いよく飛び込むと、手荷物を掲げて元気に鳴いた。

「ぶー！ ぶいぶい、ぶぶうー！」

ブタモグラの子供でグレン団の非常食……兼、マスコット的存在のブータだった。

「ブータ、何処へ行つて……それ、アニキの刀？」

シモンの腹に乗つかつた小さなブータが掲げるのは、元はジー・ハ村の村長シャクが所有、後々にカミナが強奪して我が物にした刀。

それをシモンの上に置いて、自分の鼻と交互に指差してジエスチャーやつる。

「ぶい、ぶいぶい、ぶいぶい！」

「…もしかして、刀の匂いでアニキを捜せるの？」

「ふ！」

「へえ、ブータやるじゃない。後回しにするつて決めた矢先に手掛かりね。どうする、シモン？」

横からヨーロッパも覗き込んで感心深げに眺め、今後の方針を聞く。

リーダー不在の今、臨時として指揮を取るシモンの答えは、

「じゃあ、アーチのところまで道案内を頼むよ。ブータに任せた！」

「ふい！」

頼りになる仲間に託し、ブータは胸を叩いて任せろと意思表示。

刀の匂いを嗅ぎ、次に空をクンクン嗅いで、

「ふいっと、北東を指差した。

「あつちか。それじゃあ移動しよう。グレンハウスはラガンで引っ張るから、皆は」

「あ、私もラガンに乗せてくれる? あつちは揺れが酷いし」

「良いよ。ロシウは?」

「僕は家の方に入ります。ギミー、ダリー、屋根から降りておいで」

「はい!」

「はーい」

行き先も決まり、全員が移動する為に動いていく。

その中で、唯一輪に加わらない人物が一人。

「う~ん…」

「…リーロン？ 聴いてたの？ 今からカミナ捜しに行くわよ

気づいたヨーゴが、ラガンから身を乗り出してリーロンに問い合わせた。

彼（彼女…？）は、手のひらの丸いレーダーのような機械から目を話さずに受け答える。

「ああ、オッケー オッケー。出発してちょうどいい」

「さつきから何弄つてんの？」

『気になつていていたので、さらじで三一郎は質問。

「ちょっと、気に入らないのよね。ま、グレンの方で確かめてみない」と三一郎は…』

リーロンは言葉を濁し、後で教えてあげる とウイーンク。

グレンハウスに取り付けた鋼鉄性の紐を引っ張りラガン発進、ガタゴト揺れながら、リーロンは険しい表情で思案を続けた。

「…………おかしいわ。やつぱり帰投ボイントがズレてる…………どうなつてこるのかしらねえ……」

一方、迷子のカミナは。

「腹減った…………まだ着かないのか、お前の村は？」

「……」

（結果的に）助けた少年の案内で、近くの村まで連れていつてもらつていた。

カミナはグレンに乗り、弱々しくも気合いを出して（ガンメンを動かすには気合いが必要、メカニズムは現在不明）先頭を行く白髪の少年の後を追う。

時折、少年の名を何度も呼んで急かす。

「なあ～、まだか～。俺の肉～」

だから違つって。

「……」

少年は否認するが無反応。

話の噛み合わない（意思の疎通が出来ていない）やり取りが続く。

が、それも数分後。

「…シキロ」

「あん？」

少年はぼんやりと、自分の名を明かした。

抑揚のない、平坦な声で。

「名前。シキロ」

たつたそれだけ。

振り返りもせず、歩き続けながら話す。

カミナは、シキロの素つ氣ない態度には無頓着でふーんと頷む、

コホン、と咳払い。

お決まりの見栄を切るかのように、グレンのコックピットから頭を乗り出しつて、

「そんじゃ、俺も名乗らせてもらおうか。… オウオウオウオウ…！
天下広しにのござる敵を、根こそぎ倒しゃあ闊歩して、目指す
は夜空の満月よーー！ グレン団のカミナ様たあ、俺の」

「聞いてない」

拒否された。

「…………聞けよ」

少しイジけ気味な力ミナ。

シキロはやはり無表情で喋る。

「覚えないし、すぐ忘れる」

「ああ?」

挑発とも取れる発言に、カミナの表情も少し険しいもの。

それを察してかどうなのか、シキロはすべに違う、と言った。

「あなたはボクをすぐに忘れる。顔も、声も、名前も、形も、ボクの存在そのものを忘れる。だから、あなたの名前も聞く必要ない」

短い付き合いでから、とかではなく、絶対に忘れる、と断言。

必要ない。どうせ、忘れる、と。

「…必要が無いだあ？ お前が名乗つといて俺だけ名乗らねえ道理はねえだろ？」が

明らかに拒絶されているのに、しかしカミナは引き下がらなかつた。

人の意見なんて知ったことか！　と、自分の主義主張を頑として曲げないのがこの男。

長所と短所が紙一重な性格だが、本人は無自覚なので仕方なく、力ミナは改めて名乗る。

「良いから聞きやがれよ。俺様の名前は力ミナだ、力・ミ・ナ。忘れんじやねえぞ、俺もお前の名前を忘れねえからな、シ……」

ニカツと笑い、シキロの名を呼ぼうとして、

直前で、詰まつた。

「…？」

シキロが不審げに振り返ると、そこには滝のように汗を流す鬼リーダーの姿が。

言った傍から忘れていた。

「シ……シ――シ、イイ――う?」

「……」

シキロの視線が刺さる。

カミナは必死で頭の中を掘り起こして、

掘つて、掘つて、掘りまくつて、

途中、
掘るのはシモンの専売特許だ、俺の得意分野じゃねえ。
けどな、漢にはやらなきやならねえ時つてもんがアアアア
諦め悪く、でもやつぱつと思つて出せないものは思つて出せない訳でして、

最終的二。

「…………シロッケ…………」

ズビシイツと指差し、ありつたけの氣力を振り絞つて間違えてるつて。

「…………」

シロッケの表情は固い。永久凍土の眼差しで見上げる。

見上げて、

「……、」

「アあ？」

何も言わずに回れ右、カミナに倣つて前方を指差した。

反射的にカミナも前を向くと、遠方に起伏の富んだ地形が見える。

洞穴が点在し、そこを居住地としているらしい複数の人影がちらほら。

「うわ、やけに着いたよ」だつた。

「おお、あれがシロッケの村か！ よっしゃ、飯喰うぞオ

！」

名前を間違えたままのカミナはコックピットに戻り、喜び勇んで走つていってしまった。

その場に残されて、遠ざかる紅色の背中を頭で追つシキロは、じぶんの獨立へひへ。

「…………よつこべ、旅人さん」

誰にも聽こえない声で、教えてもらひた名は口にせず、虚ろなままに、言ひ。

「誰からも必要とされない、存在する価値の無い、シナチカ村へ……」

よつこべ ……

忘れちまひだあー！？（後書き）

忘れてねーからなー！？

辛氣臭エー！（前書き）

臭すぎるー。

辛氣臭エ！！

シナチカ村では、初めての来訪者となるカミナを大いに歓迎して、盛大なご馳走が振る舞われた。

といつ都合の良い展開には、勿論、ならなかつた。

「……なんだろな。妙な既視感を感じるんだが」

洞穴の内の一つ、窮屈とまではいかなくとも、屈まなければ入れそうにない空間。そこに招かれ、期待に胸膨らませたカミナの前に運ばれたのは、読んで字の如く『質素』なおもてなしの数々。

それでは、本日の献立を『紹介しましょう。

- ・しなびたパン（一口サイズ）

- ・水（濁り六割増量中）

・ヤセホソリサカナダカナンドカ（骨だけの魚）

「.....」

とつても美味しいですね。ではまた、両手を合わせて、

頂きます。

「喰らひついー。」

パンを一口で食べて、

「飲むーー。」

水をがぶ飲みして（濁りなんて気にしない）、

「再び喰らひシ...」

ヤセホソリサカナダカナンダ力を口に放り、バリボリ噛んで胃袋に流し込んで、

גַּעֲמָנָה - תְּזִקָּה -

両手を合わせて一礼、ご馳走様でした。

経過時間、三秒余り。自己新記録を塗り替えた。

それでは感想、逝つてみよう。

「…………足りるッシッシッくああああああああああああああああああ?

! !

怒りのマグマが大噴火した。

ちやぶ台代わりに石製の台を、これでもかといつくらい豪快にひっくり返す。

こらえようのない怒りは全身を駆け巡つて、ハつ当たり氣味に、隅で正座して眺めるシキロを睨んで思いの丈をぶつける。

「なんなんだこれ！ アダイ村の再来か！？ もう少ししたら、アゴが立派な村長が現れてムカついた口上を垂れ流すのか？ ああ！？」

むしろ期待しているような言い方だが、シキロの表情は崩れない。

端的に、怒れる猛獸に言い渡す。

「それがこの村の最大限の食料だから、文句があるなり食べないで

正論だつた。

命の恩人への応対としては、どうかとは思ひつけど。

痛い所を突かれ、カミナはぐうの音も出ない。渋い顔で胡座を搔く。不満はまだ残つてゐるもの、ひとまず空腹ではなくなつたので、そこのこととは眼を瞑ることとする。

こちらもまた、ふてぶてしいことこの上なかつた。

「ま、飯は百歩譲つて食つことじつもよ」

食事後。

一息入れてくつろぐカミナは、頬杖をついてざつと洞穴の中を見回した。

シキロ以外の村の住人、それらの顔をジト目で見て、不機嫌そうに愚痴を溢す。

「この村の辛氣臭さはどうにかならぬーのかよ。揃いも揃つてカビが生えたようなツラいやがつて、余計飯が不味く感じたぜ」

カミナの機嫌を損ねているもの、それは。

「…」

「…」

「…」

シナチカ村の人間、その誰もが“死人に近く、または死人と同じような顔をしている”ということ。

客人の接待に当たるシキロも似たようなものだが、こちらはその上を行く死に顔で、

眼の焦点も定かでなく、頬は瘦け、白髪でない人間は一人もいない。

初の来訪者カミナが近づいても、

「…」

「ご覧の有り様で、返されるものはなし。誰一人として人間らしい感情をあらわにしたことがない。

常人なら裸足で逃げ出したくなる、氣味の悪い様相だ。カミナ自身も逃げはしないが、どうにも気に入らなくて虫の居所が悪くなる。

例えるなら、生きているのに死んでいるような。

活動していくのに停止していく、という感覚。

いくら無茶を通して道理を蹴っ飛ばすカミナでも、この矛盾を良しとする」とは出来そうになかった。

「…氣に入らねえ。これなら、アダイ村の連中の方がまだマシだ。あっちにゃ生きよつて意志があつたからな」

フンッと鼻を鳴らし、カミナは思い出す。シナチカ村の前に寄った地下の村、アダイ村を。

あそこも食料、生活環境が芳しくなく、住人が五十を越えると村を出て、危険な地上へいかなければならなかつた。

苦渋の選択。地上へ出れば命がないことを知っていた村長マギンの、
考え抜いた末の、最良の方法。

村人全員が生き延びていく為の、苦肉の策だ。

全ては、生きる為。

「 けどよ、この村はなんだ？ 全員死に面晒して、生きるこ
とを諦めちまつたみてーだ。どうすりゃこんな風になるんだよ。」

似たような環境、境遇を持つアダイ村とシナチカ村。一つの村の違
いである、生きることへの欲求の有無。

シナチカ村の人間は、どうして生に執着しないのか。

どうして、こんなにも生きることに消極的なのか。

唯一まともに話せるシキロは、

「捨てられたから」

事もなげに、語った。

悲哀も、悲壯もなし。

ただ、淡々と。

他人事のように。

話す。

シナチカ村の、過去を。

昔々、あるところに、とても裕福な地下の村がありました。

そこでは食料となる家畜も飲み水も豊富にあり、力ある一部の村人達が独占していました。

力なき他の村人達は、力ある村人達に従つもなく、奴隸として、生きる日々を送りました。

そんなある日、村で度々起きていた地震の内、一際大きな揺れが村を襲いました。

落盤で死ぬ者もいましたが、被害は比較的少ないものでした。

村人達は喜び、安堵して、誰一人氣づきませんでした。

本当の被害が、後からやつてこようとしていることを。

地震が起きた翌日、村の端の壁が崩れて、隣にあつた村と繋がりました。

隣村は天井が崩れたらしく、村人は無惨にも押し潰され、全てが生き絶えていました。

無事だつた村人、特に力ある村人達は哀れにも思わず、弔いもせずに放置しました。

それがいけなかつたのでしょう。やがて死体は腐り、空氣は滞つて、病魔となつて村を襲いました。

ですが、村人は何故か無事でした。人の身体に害を与えるものではなかつたのです。代わりに、

病魔の餌食になつたのは、飼われていた家畜の方。

豊富にあつた家畜は次々に病死して、村は飢饉に見舞われました。

村の非常事態に力ある村人達は困り、力なき村人達もどうなることか不安を抱きます。

そして、力ある村人達は長く話し合い、出した解決策は、

生き残りの家畜の数に合わせ、力なき村人達を村から追放。

隣村の天井に空いた穴から、地上へ追い出すというものでした。

話し合いが終わると早速、力なき村人達の中から役に立ちそうにない者達を選別し、地上へと連れ出しました。

穴のある場所から離れた場所まで行き、力ある村人達は追放された村人達へ言います。『お前達はもう要らん。此処で好き勝手生きて、

好き勝手野垂れ死ね。忠告しておくが、村に戻つてこよくなんて考
えるな。お前達の居場所は、村にはもう無いんだ。戻つてきたら、
容赦しないからな』

こうして力ある村人達は食糧難を脱して、

力なき村人、加えて追い出された村人達は、何もない場所で途方に
暮れたのでしたとさ。

めでたし、めでたし。

.....。

「…………」

ちつともめでたくなかつた。

話を聞いている間も、聞き終えた後も、カミナの表情は暗いまま、
険悪さを増していくばかり。

対称的に、当事者であるシキロや他の村人達は顔色を変えず、無味
乾燥した表情のまま。

それがまた、一層カミナの怒りに拍車を掛けることになつた。

「…で、お前らは全員絶望して、生きることを諦めたと。馬ツ鹿馬
鹿しつたらねえなあ、そんなもん気にしなけりや良いじやねーか

「…」

カミナの叱咤激励にも、村人達は無言。

めげずに説教するが、

「むしろ、村ア仕切つてる連中から解放されたつて思えや良いんだよー。それでそいつらの言つ通り、好きに生きやがれつてんだ」

「…」

「…………聞いてんのかよ、おい」

「…」

誰からも反応は返らず、カミナは一人、空回り。

誰も彼もが人形さながらな様子に、孤高の燃える男は。

「…………シロッケエーー！」

名前間違えてるつて。

「んなこたあどうだつて良いんだよ！ シロッケ、テメーらが前に住んでた村は何処にあるーー？」

語りの文に突っ込みつつ、カミナはシキロに詰め寄った。

鬼のような形相で、顔面直前まで近づいて怒鳴り、

「聞いて、どうするの？」

それでも動じないシキロが問い合わせ返すと、カミナは鬼の形相を少しだけ和らげた。

「決まつてんだろ？」「…

不敵に、不遜な笑みを浮かべて、

ビックリ、親指を立てて自身を差した。

「INのカミナ様が、直々に文句を言つて行つてやるんだよ」

辛氣臭エー！（後書き）

臭いの元を絶つてやらあーー！

સાધારણાત્મક (પ્રશ્નાંશ)

સાધારણાત્મક.

どうすんだ？

カミナという男が、現れた。

「何故かボクを助けてくれたね」

腹が減っているから飯をくれと、頼まれた。

「何故、ボクに頼むんだろうね」

村へ案内する途中、何度もボクを肉扱いした。

「滑稽だね」

仕方ないから、名前を教えた。

「無駄なのにね」

即座に忘れられた挙げ句、間違えられた。

「滑稽だね」

あの人も、名前を教えてくれた。

「無駄なのにね」

少し、揺らいだ。

「…」

村に到着して、あの人は広場で演説みたいなことをした。

「皆聞くわけないのに、哀れだつたね」

ちゅうと不機嫌氣味にボクのといひに呟つてきて、愚痴を溢した。

「良い迷惑だね」

少し、戸惑つた。

「……」

村で出来る限りのやもてなしをした。

「そんな義理、ないのこね」

一応、あるけれど。

「助けてなんて、言つてないし」

助ける必要、なかつたし

「助ける必要、なかつたし」

あの人は食事を終えると、また愚痴を溢した。

「厚かましいにも程があるね」

村のことを、聞いてきた。

「答える義理も、ないけどね」

ボクは、教えてあげた。

「…」

話し終えると、あの人は怒っていた。

「なんでだろうね」

前の村の人達にも、シナチカ村の人達にも、凄く憤っていた。

「なんの関係もないのにね」

シナチカ村の人達を、説教した。

「だから無駄なのにな」

説教を聞き入れて貰えなかつたから、前の村の人達に文句言つてく
るつて、言い出した。

「何様なんだろうね」

前の村が何処にあるのか、聞かれた。

「答える義理は」

答えた。

「…」

なんだか、酷く懐かしかつた。

「…」

ボクは、あの人のことを、あの人は、ボクのことを、

もしかしたら
…、

「ねえ、シキロ。何を期待しているの？」

…。

「淡い希望なんて持つたら駄目だよ。今まで通り、空虚でいなきや

空、虚…。

「ボクらは、価値の無い人間。廃棄された、木偶人形」

何も、求めては、いけない。

「さうだよ。今までも、これからも。ずっと専横してこう。」

クルクルと、繰り返して。

「ゴリゴリと、儻いで」

誰の為にもなれない、ならない、劣悪な塵芥にもなる、無価値な幻。

「消えてしまえることを望みながら、いつまで経ってもしがみつく、
愚にもつかない傀儡

だって、

「だつて、」

ボクは
「ボクらは、」

ボクハ、ボクラハ、ダレカラモ、ヒツヨウト、サレナイ、ムジン、
ナノダカラ。

カミナの考えは至ってシンプルなものだった。

シナチカ村の人間が追い出されて生きる希望を見失ったのなら、前の村に戻れば良いのだと。

村を支配している連中は断固阻止するだろうが、だったらこの俺様が、勸善懲惡宜しく立ち回って、成敗してやればいいと。

他人を奴隸のように扱っている輩だ。情け容赦は掛けなくともいいだろう。

「ホンパンに叩きのめして、一度とひねくれたことをしたくなくなるように、心の芯まで矯正してやる。

そつ意氣込んで、

「…」

意氣込みは、虚空の彼方に吹き飛んでいつてしまった。

シキロの説明と、紙に書いた地図を便りにシナチカ村から南へ進み、

断崖に挟まれた道を通りて、長々く歩いた先にある広い盆地には、

巨大な穴が、空いていた。

話に出てきた隣村の跡だ。それは流石のカミナもすぐに理解したの
だが、

「穴が……一いつたあ、な」

カミナが要のあつたもう片方の村の位置にも、似たような大きな穴がポツカリと空いている。

悩まずとも知れたこと、シキロ達の前の村は、もつ盆地には存在していなかつた。

ちょっと予想してなかつた事態に、カミナは立ち尽くして頭を捶いて、

もしかしたら生き残りがいるかも知れないと穴に近寄り、両方共に見下ろして確認。

「…あー、駄目か」

遠目からでも判る、大量の瓦礫や土砂の合間から覗くのは、明らか

に人の骨。

一つの村だけ共に生存者なし、死体は全て白骨化していた。

「参つちまつたな……、どうするよ、俺」

すっかり計算が狂つてしまつて、途方に暮れる。まさかシキロ達の前^{まへ}の村まで、落盤で消失していたとは思わなかつた。

これで故郷の村に帰ることは不可能、問題解決の糸口も見えなくなつた。

「またシナチ力村に戻つて説教垂れても、あいつら聞いてんのかどうかも怪しいしな。ホンシト、地震の野郎を恨むぜ……」

元氣が取り柄のこの男も、今は悪態を吐く他ない。

思えば、カミナの故郷・ジー・ハ村も地震が多くて困っていた。弟分のシモンの両親も天井の崩落で死に、それがきっかけで内気な性格が益々悪化したのだ。

さらにカミナの乗るガンメン・グレンを手に入れる時も、シモンは地震の原因を突き止めて熱く激昂していたし

「…ん？ 地震の原因？」

はたと、頭の中に奇妙な引っ掛けを感じて思考を止める。結構昔の出来事に感じる記憶、地上へ出て、ジー・ハ村の隣村であるリットナーでの会話を辿つていき、

カミナの記憶が蘇る。村で頻発していた地震の原因は、

ガンメンを操つて人間狩りをしていた、獣人達であったことを。

「確かに、ジー・ハ村を出る時、アゴのでかいガンメン野郎とマーゴがドンパチやらかしてて、地上の方の底が抜けてジー・ハ村に落ちたとか言つてやがったが…」

ここにある村も、天井が崩れて村が壊滅している。

その要因 地震をガンメンが起こしているのなら、“ガンメンが直接村に落ちた”と考えることも出来る。

「そんで、壁が崩れて現れたもつ一つの村もガンメンが潰したのだとしたら、だ」

その仮説が正しいとして、それがもし、じく最近のことだったとしたら、

二つの村を蹂躪したガンメンが、未だこの付近で稼働している可能性がある ！

「だとしたら、…………シナチカ村がやべえ！」

考へ至つた答えにカミナは焦つた。シナチカ村は、どの視点から見ても自衛出来るような装備は見当たらないし、地上で数少ない村だ。獣人達が放つておく筈がない。

急いで村へ戻らなければ、と踵を返して、来た道を戻つて全速力で駆け出す。

手遅れになる、その前に。

。 . . .

カミナガ村の跡地から去つてすぐ。

「ブータ、まだアニキのところまで着かないのか？」

「ふいー、ふー。」

「近くにはいないわね。あそここの渓谷の間を通ればいいの？」

「ふいー。」

「…………あれ。シモンさん、ちょっと止まつて貰つて良いですか？」

「どうしたの、ロシカ?」

「いや、何ううん……もしかしたら……」

「スッゲー、スッゲー、でつかいあなー！」

「おつかー

「……あらま。これ、村ね

「……共漬れてるわ……、地震かしらへ。それとも、」

「ガンメン…………じつにしても、地震もガンメンが起こしているから変わらなこよ……、」

「シモソヒス?」

「嗚呼、じめん。俺の両親も落盤で亡くなつたから……」

「ナヘ、でしたか」

「……そんなに深いって訳でもなさそつだけど、降りるのは諦めた方が良さそうね。お墓、作つてあげたいとは思うんだけど」

「仕方がないわよ、降りてる最中に崩れてペチャンコ……なーんで、私は嫌よ?」

「やうね。……て、リーロン、何してるの？」

「ちょっとデータを探るの。この村がいつ崩壊したのか、とかね。記録において損はないし、データが思わずとこりで役立つたりする」

「へへ。じゃあ、俺達はここで待つようか」

「良一わよ、そんなに手間は取らせないから……と、はー終わー」

「べつですか？」

「やうねー、時期は違うけど、両方共、ずっと三十年は経ってるわ。昨日今日の話でないのは判つてたけど、それでも最近のことね」

「……？ 村が潰れたのが昨日今日じゃなにって、なんで判るの？」

「白骨化しちゃってるじゃない。死体って、腐って分解されるまで時間が掛かるし、十からびてミイラになつたら、白骨だけでは残らないし」

「へ…」

「骨が散していいことから、野生動物に食べられていないことも知れますね。それに食べられていたとしても、多少の肉片が残りますよね」

「う…」

「そうよ。だからこれは、ぱっと見ただけでも一ヶ月以上は経過しているつて…………あら、どうしたの、二人とも。顔色が悪いわよ」

「だつて、ロシウとリーロンさんの会話が…」

「怖すぎるのよ……私もちょっと引いたわ」

「自然の摂理を説いただけじゃない。臆病ね～」

「す、すこません。気が回ります……」

「ううん、良いよ。そ、それで、どうよつか？」

「手を合わせて、冥福を祈りましょ。せめてそれくらいはしてあげなことね」

「そつか。それじゃ」

「お墓を作らなかつたことを逆恨みして、化けて出たり……」

「…」

「…」

「え？ 僕、また何か…？」

「ロシウー？ 今のは私も引いたわよー？」

「…」

「…」

なにかんだ？（後書き）

て、言ひてゐる場合かよー。

一一加減にしやがれ（前書き）

ゞチクショウが！

いい加減にしやがれ

ガンメンの襲来を危惧したカミナが、一路、シナチカ村へと急いでいた頃。

「 シャア、日没まで時間もないし、サクサク終わらせてやる
シャ～」

ズンッと地響きを鳴らして、一つの巨影が村へ近づく。

影は、カミナの乗るグレンと同じく、顔に手足がついたガンメン。しかし通常のガンメンとは違い、口と、背面から突き出る尻尾が長く伸びた奇形となっている。

蛇をモチーフにしたと思われるその名はボスウロロ。それを操縦する獣人ダシャーは、コックピットで両脇の操作レバーを握り、先端が一つに割れた舌をチロチロ震わせながら、村の広場にいる人達に狙いをつけた。

「今日この悪夢とオサラバシャア！ 行け、ボスウロロオ！」

…。

「……チツ、予想通りの展開かよ！」

帰路を辿り終え、村まで走ってきたカミナの目に飛び込んできたのは、逆巻く粉塵と激しい破壊の爪痕。

一足遅く、シナチ力村は敵獣人に襲われていた。

洞穴のほとんどは崩れて、周囲には負傷した村人達が無惨にも転がっている。

村の中央、広場の方には、この惨状を築いたガンメン・ボスウロロが、村人に襲い掛かる真っ只中だ。

カミナは考えるより先に走り、敵の攻撃を止めようとするが、

「あいつら、何してやがる…………なんで逃げねえんだ！」

敵が迫っているのに村人達は微動だにしない。逃げる素振りも、否、関心自体示さない。

そして眼前で行われた光景に、カミナは、愕然として足を止めた。

「な……」

ボスウロロから伸びる口部の牙、当たれば致命的となる狂牙が迫つて、呆然と立ち尽くしたままの村人が、

無情の一撃でもって、ビリビリに、引き裂かれてしまった。

「 ッツ」

生々しく凄惨な場面に、言葉を失う。

人一人殺されるのを田の辺たりにして、呆氣なく散つた命をまざまざと見せつけられて、

カミナは、己れの無力さと不甲斐なさに、言い知れぬ怒りを覚える。

いつしていれば救えたかも知れない。もしかしたら助けてやれた。

なんて戯言を、のたまつことも考えもせず、ひたすら募り積もっていく激情に身体は支配されていく、

「お、おオ…………ん、の、ヤロオオオオツーー！」

激怒の矛先は敵ガンメンへと注がれて、爆発した。

いつも携帯している刀もない丸腰で、

村外れに置いてきたグレンを取りに行くのももじかしく、

ただ、今は、一分一秒すらも惜しんであのガンメンをぶちのめしたい。それだけを思い、生身では敵わないなんて理屈も隅に追いやつて、固く握り締めた拳を振り上げたカミナは、

「やめた方が良いよ

「ツ。……シロツケ！」

疾走するところを、横から現れたシキロに呼び止められた。

彼は上手く逃げていたのか怪我はなく、出会い、一旦別れるまでと、やはり変わらぬ能面で、

「驚かすんじゃねえよ、つたぐ……！」

何より見知った顔が無事だったことに、カミナの憤激は安堵の念と中和、冷静さを取り戻させる。

が、それも束の間。

「……て、こんなところで突っ立ってる場合か！？　あの野郎は俺が相手すっから、他の奴らを連れて隠れてやがれ！」

すぐに場の状況を思い出して、捲し立てた。

「……ううだうだしている間にもガンメンは村人達を襲っている。それだけならまだしも、襲われる側には逃走する意思もない。

四の五の言つている暇はない。

なのに、

「良いよ、助けなくて」

「そうだ早く助け……て、ハアー！？」

拒否された。またしても。

上手く聞き入れられなかつたカミナミーの足を踏んでしまつた。

助けなくて良い、といつのは、自分達は殺されても良い、と言つて
いるのと同義だ。

僕達は、これから、死ニマス、と。

遠回しに、けれど簡潔に、言い含められたのだ。

ねじ曲がつてゐるにも、程がある。

「お前……いいや、お前ら全員なあ、いい加減にしやがれよ！
ずっと奴隸でこき使われて、村追い出されて絶望したからつて、死
んでいい理由にはならねえだろ？が！！」

馬鹿げた一言で再燃する怒り。

拒まれたからといって後込みするような氣弱ではないのだ。時間も暇もないが、言ひ返さずにはこられないと。

「酷^ヒ目に遭つて辛くねー訳はねえよ。けどな、お前らまだ生きてんじやねえか。ちつたあ、前を向いて生きやがれ!」

カミナは寝惚けた頭を吊り起こす怒声で叱つける。

あらんが、さうの言ひ方を知つてゐるからこそ、の猛りで、

彼らを想つかないし、説得する。

なのに。

「どうして…」

「届かない。シキロには、シナチカ村には、

届かず、

「どうして、生れるの？」

「どうして、だから……」

「誰からも必要とされていないの？」

「…ッ」

並べられる、千切れた心。

「価値が無いの？」

「てめえ…………ツ！」

歪んだ考えを否定しようとする力がナマヘ、

「存在する意味の無い、」

「“無人”なのに

「 」

嫌でも、理解させる。

貴方の解釈は、根本的に間違っていると。

これは生き死にの話“ではなく”。

在る無しの、要るか要らないかの、問題なのだと。

いい加減にしゃがれ（後書き）

。。

笑えねえんだよッ（前書き）

あやんあやん可笑しいぜーー！

笑えねえんだよッ

「く……くへ。……くははは、は」

カミナは、力なく笑つた。

「はははは。あつはつはははははは…」

可笑しいのか、怒つているのか、止めどなく笑つた。

「くくく……あるほどなあ、成る程ねえ。お前らは、必要ない
つて言われたら、はい判りましたつて領いて、消える訳だ。わつは
はははは」

「…」

笑つて、笑つて、とにかく笑つて、

シキロのことも、村人のことも、新しい獲物を選んでいるガンメンも眼中になく、とにかく元気、笑う。

誰からも必要とされないから、と言つた。

必要とされていた頃、それを当たり前のようを感じていたからこそ
の妄言だ。

価値が無いから、と言つた。

奴隸として生き、物として扱われてきたから、疑問にも思わなかつ
ただけだ。

存在する意味が無いから、と言つた。

本人達は意味がなければ、そこにおいてはいけないと信じ込んでいる、証拠だ。

無人だから、と言つた。

自分達はそこにはおりず、生きてても、死んでもいないと抜かしやがつた。

生存する意思を失つたのではなく、存在する意義を、見失つたのだ。

「最つ高だなおい。アダイ村の比じやねーよ、こいつら。マジでウケるぜ。アッハツハツハツハツハツハツハツハツハツ」

あまりに あまりにも哀れなシナチカ村の無人達に、もう笑うことしかしてやれない、といった感じで。

抱腹絶倒とはまさにこのこと、笑い倒した男は前屈みでゼーゼー息切れして、

ふう、と一息入れて。

「ホンツトーに笑えねえ[冗談だ]この大馬鹿野郎」

ボソッと吐き捨て、つまらなそうに笑みを剥がし取つて。

足下に転がった拳大の石ころを掴み、

「…ビツツツツツツセえええいーー！」

全筋肉に力を入れて、振りかぶって、投げた。

石ころは弧を描かず、猛烈に回転しながら突き抜けるような砲弾と化して一直線に飛び、

次なる標的を決めて、動かぬ人形に喰らいつこうとしていたボスウロロのロロに、直撃する。

『ツシャアー！？ 誰シャ、今石を投げつけたのはー！』

ぶつかつた衝撃で狙いが外れたボスウロロから、甲高いスピーカー音が発せられた。

キヨロキヨロ辺りを捜して、犯人を見つける前に、カミナの方から名乗りを上げる。

「オウオウオウオウ！！」のヒョロッちいガンメン野郎が、悔しかつたらここまで来やがれ！」

中指を立てて挑発ポーズ。

狩られる側である人間に舐められて、敵ガンメンの搭乗者は怒り狂い、

『ヒョロッちくなんかな』

カミナを見て、

『…』

ピタリと、硬直した。

「あ、あの人間は、あの時の…ツ」

ボスウロロのコックピットでは、ダシャーが、昼前のやり取りをフ
ラッショバックさせていた。

人間如きに不覚を取り、食肉として見られたあの屈辱が、

『肉……肉だ……肉が走ってるぞオ ツー！』

『にいく肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉一クニクニクニクニクニクニクニクニ
クニクニクニクニク』

喰われかけた憎しみが、

『にツツツきゅうううううううううううううううツツツツ

『がつぶウウウウウウウウ…』

どつかといえば、屈辱とかよりも、

『ガウガウガウガウガウガウガウガウガウツツツ』

『頂きます』

「あ……ああ……嫌ア
ツツツ！？」

ツツツ！ 食べないでえ

恐怖感が強すぎて、ガタガタ震え出してしまった。

ダシャーが戦意喪失したことでボスウロロも停止に。外にいて、中の様子が判らないカミナは躍起になつて挑発を繰り返す。

「くおーりー、聞いてんのか！ それとも怖じ氣づきやがつたか！？」

その通りです。

「……いや、待つつシャ。奴は俺が乗つてることを知らないシャア？」

ギヤーギヤー喚いているカミナの声に、ハッピダシャーは氣づく。挑発がエスカレートして、尻を突き出して叩くカミナを強く睨む。

相手はまだ気づいていない。それに、こりゃにはガンメンだつてある。

恐れる必要など、ない……！

「やつだシャア…………舐められっぱなしでは終われんのシャア！
俺は、今、トライウマを乗り越えるつシャア ッ――！」

決意と共に、ダシャーの咆哮が轟いた。

『俺は、今、トライウマを乗り越えるつシャア
ツ――』

「何が？」

臀部を叩くカミナに、その気迫は伝わらなかつた。

『シャア、ズタズタにしてやるシャー！』

勢いに任せて再びボスウロロが動き出す。村人には目もくれず、カミナだけを標的にする。

カミナの思惑通り、誘導されてくる。

「つし、そうだ。ついてきやがれ！」

向かってくるボスウロロに対し、カミナは逆に向かわず、別方向に走り出した。敵前逃亡なんて死んでもやらなそうな男だが、現状、そんなことは言つていられない。

村人達に被害が及ばない場所まで、思う存分闘える場所まで、敵を引き連れていかなければいけない。

。 . .

カミナが敵ガンメンを連れていなくなり、取り残されたシキロは。

「…行っちゃったね、無駄なのに」

一人でボソボソ呟いて。

(やうかな、本当に無駄かな)

聴こえぬ声が、返事を出した。

「無駄じやないって？ 部がそんなことを言つなんて、可笑しいね」

聴こえぬ声に、シキロも応えた。

可笑しいと言いながら無感情に、無感情ながらも皮肉に、反論していく。

「侵略者を倒しても、シナチカ村は希望を持たない。そんなことをしても、無意味だ」

(やうかな、無意味かな)

「無意味だよ。人形は人形のまま、無いものは無いままだ。ボク達はそこには無いし、何処にも在りはしない。ずっと、ずっとだ」

(まるで蜃気楼のようごく)

「やうだよ。ボク達はいらないんだ。いのよつに見えるだけで、実像は無い。儂いで、虚ろいで、だから、」

(救われない、て?)

「…」

シキロは黙る。深く、深く、黙り込む。

反して、聴こえぬ声は、問い合わせる。

(それならボクは、ビリして此処にいるの~)

「…

(ビリして、蝶の~)

「…

(ビリしてあの時、)

「…あの人には、声を、掛けたんだら？」

あの時。

食えたカミナが獲物を逃がし、うちひしがれていた、あの時。

カミナはシキロに氣づいていなかつた。

話し掛けなければ、カミナは氣づかぬままに立ち去つていた。

それで幕は下りていた。終わっていた。

なの。

(「どうして声を掛けたの？ 不可解だよ。ねえ、どうして？」)

「それは…」

言い淀む。

答えられない。

判らない。

どうして、

(「ボクが、あのを、必要としたんじゃないの？」)

「…、」

聴こえぬ声が、シキロの心臓に食い込んだ。

その時。

『…………聞イ
つてつかア！？ 、シナチカ村のしみ
つ垂れ共オツツツ！？！』

村外れの辺りから、耳を劈く大声が、

村全域に、木靈した。

笑えねえんだよッ（後書き）

耳の穴かつぽじつて、よーく聴きやがれ！！

止まんなアーー（前書き）

すり込んでるッーーー

立ち止まんなア！！

少し時間を巻き戻そう。

『……シャア——！　待ちやがれッシャー！』

「待てと言われて待つ力ミナ様じやねエ ツツ！」

シキロ達の身を案じて敵を陽動する力ミナは、村の外までがむしゃらに走っていた。

風雨によつて削られた円錐形の奇石群の隙間を、ジグザグに縫つて駆け抜けていく。

背後からはボスウロロが、邪魔な岩を蹴散らしながら追撃。

飛んでくる尖った岩石や牙の猛攻をかわしつつ、追いつかれては根

性を見せて引を離す。

たまに、

『ちよこまかちよこまかと…ツ！　かかるて来いつて言つとこで、逃げるなんて情けねー野郎だシャア！』

「んだと！」これは逃げてんじゃねえ、戦略的撤退だア！
！」

飛来物と一緒に投げかけられる罵声に、いちいち言い返して。

「……見えた！　あそこまで行きやあッ、こつちのッ、もんよオー！」

大分息が上がりてきて危ういカミナを、見慣れた紅いボディのガングンが出迎える。

後続を行くダシャーも、カミナの向かう先に気がついて田を見張った。

「あのガンメン……あの肩のマークッ！ 最近噂になっているグレン団シャアー！？ じゃあ、今追い掛けているのはそのリーダー……」

本部より報告のあったグレン団の活躍を思い出し、一抹の不安を抱いた。

グレン団はこれまで、相当な実力者である極東方面部隊長、ヴィラルを撃退してのけ、各地で活動する他の仲間達もことごとく返り討ちにしている。

近々、獣人軍四天王の一人であるチミルフが動くとさえ囁かれる程のグレン団を前に、ダシャーは自分が敵うのかと逡巡

、
『頂きます』

「…頂くなッシャアーーー！」

トライウマをバネに、挫けかけた心を奮い立たせて、仇敵を捉えようと口部を伸ばして攻撃した。

しかしカミナは余裕を保つたままだ。まだグレンまで距離を残すが、ダシャーが迷つている隙に猛烈ダッシュして、両者間に差を空けている。

いくらボスウロロが牙を剥いても、カミナにはかすりもしない。

「ヘッ……残念だったなッ、そこからじやあよッ……届かねえ…！」

息切れしながらも勝ち誇った。グレンまで辿り着ければこちらの勝ちだと言わんばかりに。

それを受けて、ダシャーは。

『…………——イツ』

「…？」

邪悪にほくそ笑んだ。

瞬間、

『…………油断大敵ツシャア！——！』

「な……つおアアー！？？」

限界まで伸ばされていた口が“さらに伸びて”、カミナを地面“”と
弾き飛ばした。

「…………ツツツ」

全身を襲つ強い衝撃、それに歯を食い縛つて耐えるカミナは目撃する。ボスウロロの伸びる口部の先、本体を越えてその後ろの尻尾が、極端に短くなっているところを。

ボスウロロの口と尾は直接繋がつていて、連動して伸縮することが出来る！

『シャアー！！ どうだシャア、思い知ったシャ、人間！』

舞い上がつた砂埃にカミナは呑まれ、先程とはうつて変わって強気なダシャーが歓喜に湧いた。

確実に仕留めたと確信し、不様な姿を拝もうと走り寄つて、

『シャーツハツハツハツ…………ハ？』

舞う砂塵が収まつたその場所に、カミナの姿はなかつた。

あるいは、ボスウロロの口撃で抉れた盾盤と砂だけ。

想像していたものと違う光景にはて？ ヒダシヤー。ボスウロロは小首を傾げて、

『…思いつきり吹つ飛ばしてくれてありがとよ！ おかげさんで、早くグレンのところまで来れたぜ？』

間の抜けた仕草をしている間にグレンが作動、コックピット内からはカミナが、健在ぶりを披露するよつに憎まれ口を叩いた。

その裏では、打ち身と擦り傷と疲労と空腹で、内心かなり疲弊していたが。

へたれている時ではないと、元気を装つて強がる。カミナには、やらなければならぬことがあるのだから。

『シャ…………シャー！ それが、何だつて言つんだシャアー！？ そつちはまだ、合体してねえシャ？ だつたら、まだ勝機はあるツシャアー！』

こつちはこつちでまた強がつていた。ガンメンの有無で築いていた自信が、脆くも崩れ去つていく。

が、ダシャーの言い分もあながち的外れではない。グレン団の強さの根幹は、カミナの乗るグレンと、シモンの乗るラガンの一機が合体してからなる『グレンラガン』によるもの。

つけ加えれば、グレンラガンの強さはラガンの能力で成り立つ。グレン単体では戦闘能力も、機体耐久度も格段に落ちてしまつ。

『やつてやるシャア…………』でグレン団を潰して、一旗上げてやるツツシャー！』

勝てば汚名返上、のみならず、栄光まで掴める。またとないチャンスにダシャーは一念発起、果敢に立ち向かっていった。

『シャアアアアアツー！』

ボスウロロの尻尾が唸る。今度は口部を縮め、最大まで伸ばした鈍器に遠心力を加えて、

『ゴドン！』と、グレンの左肩めがけて叩きつけた。

まともに食らつていれば、通常のガンメンを軽く大破させる威力だ。これではグレンですらひとたまりもないだろ？

まともに食らつていれば、だが。

『気合を入れて来たところ悪いんだがよ……』

『シャ……ッ』

尾は腕でしつかりとガードされて、グレンはほぼ無傷だった。

最大の一撃を防がれたダシャーは呆けて、カミナは構わず、腕を尻尾に回し込んで脇で挟み、ギュッと絞める。

もう片方の腕も尾を掴み、体勢は低く、腰を捻つてボスウロロを引つ張りあげると、グレンを中心によつくりと回転し始める。

『先客を待たしてんだ、ちいとばっかし、どつか行つてやがれエ……ツツ』

『え……え、ええ?』

回転は徐々に速度を上げていき、旋風を巻き上げながら荒れ狂う竜巻となつて、

速度が臨界点を突破した時、力ミナ渾身の必殺技が放たれる！！

遙か彼方へぶん投げた。

手を離した直後に機体は影を絶ち、ボスウロロは泪を流しながら大空を飛翔、

キラーンと光つて視界から消えた。

「そんで、だ。次は

」

戦うべき敵を一時退場させて、グレンはシナチカ村へと向き直る。

やらなければならぬこと。

果てしない馬鹿共に、言ひて聞かせなければならぬことを、言ひ。

グレンのスピーカーの音量を最大にして、

『…………聞イ
つてつかア！！？ 、シナチカ村のしみ
つ垂れ共オツツツ――！』

腹の奥底から噴き上がるもの、吐き出した。

傷ついていようが、疲れていようが、腹が減つてひもじかろうが、

そのへりこの些事など、捻り潰して喚き散らす。

『 unnecessaryだの価値がないだのいる意味がないだの！ すっとぼけたことを散々並びたてやがつて、ふざけんのも大概にしうよッ！？』

誰にも聞いて貰えなくとも、誰にも声が届かなくとも、そんなことは関係ない。カミナは想いの丈をぶち撒ける。

聞き届けて貰えないなら、勝手気ままに叫び倒す。

それが、この男のやり方。

グレン団不撓不屈の鬼リーダー・カミナの、生き様なのだ。

故に、叫ぶ。

全身全靈で、声を張り上げる。

『己れの我を、貫き通す……！

『誰も必要としてくれないだア…………？ だったらア、テメエがテ
メエをオ、必要とすりや良いじやねえかア！…！』

「…やりたい、こと」

『俺様は、やりたくねえことは死んでもやらないねえカミナ様だ。やりたいことは死ぬまでやり通す、不撓不屈のカミナ様だ！！』

シナチカ村の隅々まで、カミナの声が行き渡る。

「…」

『だつたらア、テメエがテメエをオ、必要とすりや思こじやねえかア！！』

空気を震わせ、大地を揺るがし、漢の魂をぶつける。

『誰から何も言われなくたってなあ、笑いたい時は笑えば良いし、泣きたい時は泣けば良い！ ムカついた時は、怒鳴り散らして騒げば良いし、面白けりやあッ、また笑え！！』

「……誰から、言われなくとも

「笑、う……」

その一言一句が、村人達の虚ろな身体を、穿っていく。

「……馬鹿だね。あの人は」

そんな中で、出逢った頃から彼の声に耳を傾けていた少年は、静かに口を開いた。

「自分で自分を必要とする、なんて屁理屈、聞いたことないよ。本当に、馬鹿だ」

（「うそ、本当に面白い馬鹿だよね」）

聴こえぬ声も、賛同した。

そして声は、シキロに訊ねる。

（話し掛けて、正解だつた？　その人を村へ招いて、良かった？）

「……」

シキロは、また黙つた。深く、深く、黙り込む。

でも、それは、答えられないから、ではない。

答える、までも、ないのだ。

（あの人は…カミナは、きっと色々な人から必要とされるんだろうね。行動力もあって、強い意思もあって、絶対に折れたりしない。だから、誰もが憧れて、惹かれて、慕うんだろうね）

「……」

聴こえぬ声は、羨ましそうに、語る。押し黙るシキロに代わって、淀みなく、推察する。

（でもさ、カミナが色々な人から必要とされるのって、自分から望んだ訳じゃないよね。必要とされたくて、そんな自分に成ったんじゃない。それは、結果的にそうなつただけなんだ）

カミナの生き方は、血口中心的で独りよがりなもの。欲望に従い、偽りらず、常にあつのままの自分を露出する。

誰かから言われたんじゃない。命令されたことじやあ、ない。

己れの為に、そつ在る。

「……」

（誰かに必要とされなくとも、其処に居続ける。誰にも文句は言わせない。だつて、自分のことを決められるのは、自分自身だけだから。だから、）

「……ボク達も、ずっと此処に、留まつていた」

曝け出す、本音。

無い」と言いながら、在る矛盾。

空虚でありながら、形を保っていた。

それは、自分達が、

(ねえ、シキロ。……ううん、ボク。もう、良いんじゃない
?)

「……」

聴こえぬ声が、諭す。

自分に正直になるよう、迫る。

(ボクはもう、いない“ふり”をするのは、疲れたよ。そろそろ、
動こう?)

「…………ボク、は

シキロは、返答に詰まつた。

決心が、つかない。

その最中にも、カミナの声は、シキロの鼓膜に鳴り響いて、

『いつまでも立ち止まつてんじゃねえ!! 一生に一度のテメエの
人生だ……テメエの好きに、生きやがれッッ』

「……」

(どうしたい？)

「…ボクは

シキロは、

「……“僕”は、止まりたい。もう、繰り返すのは、嫌だ」

悪夢から醒めた、穏やかな顔で、答えた。

聴ひえぬ声も、そつか…と、嬉しへりて、頷いた。

動を出したいに聴ひえぬ声と、

止まつたこと願ひシキロ。

一つの願いは、同一だ。

やつと、一つは、一つになる。

(それじゅあ、)

「それじゅあ、」

(動き止め)

「終わりはいつ

「（永遠に廻る続ける螺旋から抜け出して、僕達の幻想に終止符を打とう）」

立ち止まんなアー！（後書き）

判つたかコラアツー！？

クライマックだア！！！（前書き）

スカッとしたぜ！

クライマックスだア！！！

…、

『…………テメエの好きに、生きやがれツツツ』

溜まっていたものを、全て吐き出し終えて。

「…………ふはッ！ ハツ、ハア、はア、ハア……ツ」

カミナは、痩せ我慢が尽きるよつに頭を垂れた。

満身創痍の身体に鞭打ち、顔中に汗が滴る。荒い呼吸を刻みながら、弱々しくも笑みを溢す。

「ゼツ……ゼえ……つこれで、まだ判ら、ねえならツ……一人ずつ
ハツ……ぶん殴つて、やつから、な……ハアツ」

伝えたいことは、伝えた。

聞いても、画いてもいないうちに、どうやらねじとつあえずはまへててくた。

単なる自己満足に過ぎない、無駄なことなのかも知れないが、

それでも良い。アダイ村のようだ、完全に拒まれていた訳ではないのだから。

あの村で、カミナもまた、部外者だからと、不必要とされたのだから。

なんとなく、シキロ達の気持ちを理解出来た。出来たからこそ、許せなかつた。

要らぬこと言われたからといって、自分を捨てるのではない。それ
じゃ、自分を廃棄する必要は、無い。

前を向いて、足を踏み出し、止まりずに、歩いていけ。その行動の
価値なんて考えるな。意味なんて、考えるだけ損するだけだ。

感じのままに、在れば良い。

シナチカ村は、決して、無人などではない
。

と、そこまで深々と考えていたかじつかはせておき。

一つだけ確實に言えることは、カミナにとつてシナチカ村の在り方
は気に入らなかつた。なので物申した。

大体そんなところだらう。

アダイ村から引きずつっていた鬱憤も晴らせたようだし、カミナの気分は割合上々だったが、

「くう……腹、減つた……やつぱ足んねえよ、あんだけ……
…ア、ツー？」

息を整える暇もなく、背後から不意打たれた。

何事かと振り返ってみれば、遠くに飛んでいったボスウロロがいつの間に帰還、グレンの背中に噛みついている。

搭乗者はどうやら怒り心頭らしく、シャーシャーと甲高く鳴く。

『コノヤロッ、人を何処かに投げといて、何一人で騒いでるつシャー！？ お前の相手はこの俺シャー！？ 盛大に無視してんじゃねえッシャー！！』

「ええい……、今から相手してやれりつて黙つてたどりのやつ……ッ

すっかり忘れていたことは内緒で、カミナはすぐさま反撃、ガツチ
リ食い込んだ牙を外そうとする。

外そうと、

「は……」のシ……て、ハズレねえ、だと……シ?』

体力の限界がきているせいか、いくら張つても力が出ない。

上機嫌が一転、窮地に立たされて焦燥するカミナを、ダシャーが容
赦なく追い詰めていく。

『シャア!! 装甲を噛み碎いて、中身を引きずり出してやるシャ
ア!!』

「ち、くしょ…………情け、なさッ…………過ぎんぞ、カミナアアア…………
…シツ」

どれだけ足掻いても微動だにしない。

体勢の悪さも相まって、手の出しどりが、ない…………！

「く、お、お、オオ……………！」

『これでえ…………終わりシャアー…………』

ビキリ、と亀裂が走る。

じゅくじゅくと、ジワジワと、裂け目が広がっていく。

カミナはもがき、牙は外れず、

ダシヤーは笑んで、舌なめずりし

「...カミナア

ツ！
ツ！
ツ！

青白い閃光が、空気の膜を破いた。

射ち出された光の軌跡が、狙い違わずにボスウロロの側面へ激突。

『ジャー！？』

「つとオ、助かつた……！」

着弾の威力に押されて機体は倒れ、グレンに食い込む牙も外れる。

危ういところを救われてカミナはホツと安堵、横槍を入れられたダシャーはもう何度も目になるのかぶちギして、

『今度は一体何だつて……ハツ』

『ありやあ……へつ、美味しいとこかいつらいやがる。つてたぜ、シモオン！… ヨーコオ！…』

待

ダシャーの顔は引き吊り、カミナの顔は滲剝とした。

両人の眼に浮かび上がったのは、一矢張り側に向けて猛進してくる小型のガンメンの影。

紐で引っ張るブロック型の家が、凸凹の激しい地面で跳ね回っているのも気にしてない。

ようやく再会することの出来たリーダーを助太刀する為、グレン団は、超特急で一体のガンメンに近づいていた。

「……あの紅い機体、やつぱりアーニキのグレンだ！」

短い足で懸命に走るラガンのロックピットで、ゴーグルを掛けて遠くを睨むシモンが断言する。

隣で立ち上がり、火を吹いた超電導ライフルから空薬莢を排出、次弾を装填するヨークも頷き、

「聞き覚えのあるうるさい声を追つてみれば、大当たりね。でも、敵と交戦中とは思わなかつたわ」

「うん、早くアーチキと合流して……」

さらに加速しようとハンドルを操作する手前、後ろのグレンハウスから、必死な叫び声が送られた。

「し、モンッ、さん！ 提、あんが！ あつし、あるの、です……
ギヤーー！」

小刻みに揺れて喋り、うなロシウと、

「ハウスは置いて……ヒィア！？ ッてえ、良いからー。こんな、
揺れる、なん……聞いてッないわよ？！」

手製のメカや機材が散らばるのを抑えて訴えるリーロン。

「わ～い、わ～い、ジャンプジャンプ～！」

「のー」

ギニー、ダリーは器用に跳ね回って苦にせず、むしろ大いに楽しんでいたが、

「あ、」めぐ……」

劣悪な家庭内環境に苛まれる住人の苦情に、シモンは思わず速度を落とす。他に敵がないとも限らない状況で、ロシウ達を置いていくことは論外だ。

カミナの加勢に急ぐのと、グレンハウスを放つていけない焦れったさに、シモンはどうにも行き詰まってしまった。それを見かねたヨーロが打開案を提示、

「シモン、ハウスは私が残つて守るわ。だから早くカミナといふくつて、」

「ふいーー！」

シモンの首にしがみついていたブータもヨーロの胸の谷間に移動、ピッヒグレンを指して一鳴きした。

小さな仲間の意図に気づいて、ヨーロはクスリと笑つて代弁してやる。

「ブータも一緒に守つてくれるつて。…行って、シモンー。」

「うん、判ったよ」

仲間の後押しを受けて、ラガンは紐を手離して再加速する。ヨーコとブータは直前で後ろに飛び、地面をスライドしながらグレンハウスに残つた。

「アニキイ　　ツー！」

身軽になつたラガンが全力疾走する。グレンまで脇目も振らずひた走り、差し迫つてくると「ツクピットのシャッターを閉め、飛び上がつて下腹部の足を収納。一本のドリルを出現させてドリルヘッドモードへ。

一つの弾丸となつて突進してくるラガンを、グレンは両腕を広げて迎えた。

『オオ、来いシモン！.. 合体だア！..』

突撃してくる相棒のドリルが、グレンの頭部めがけて直滑降、二つのガンメンが一つと……

『させらひシャアー！……』

なるのを食い止めようとボスウロロが奮起、ラガンの行く先を阻もうと口部を伸ばす。合体されれば、勝敗は決してしまう！

だからこそ、

「それは、こっちの台詞よ？」

『え……ジャウー。』

邪魔が入らないよう、グレンハウスの屋根に仁王立ちしたヨーコが援護射撃、ボスウロロの口を弾く。

結果。

『ぐ……そおオオオオ…… またやりやがッ』

『よお、待たせちまつたなあ?』

『 、』

心的外傷を呼び起^ハす剛胆な声が、ボスウロロにて、内部のダシャーに降り注いだ。

恐る恐る見上げれば、二つの顔が合わさった八頭身のガンメンが、腕組みして影を落としている。

合体したことで、全体的に寸胴型だったグレンのボディはスリムに

変形、

頭に突き刺さったラガンには、宿敵ヴィーラルのガンメン・エンキから奪つた、三日月シンボルの兜が光る。

威風堂々の佇まいの鬼神、その名は言わずと知れた『グレンラガン』。

数多の獣人軍を殲滅してきた人間の英雄機その降臨に、ダシャーは青ざめて硬直。

怯える蛇に、なんとかこうにか持ち直したカミナの、無慈悲な言葉が掛けられる。

『早速で悪いんだがな、テーマにど突かれたり、つつ走つたり、空きつ腹が身に堪えたりで、あんまし余力が残つてねえんだア…』

言つて、グレンラガンの右腕が上がつて拳が握られる。手首の、袖

にあたる部分に備えられた二つの吐出口から鋭いドリルが、白銀の輝きを放ちながら高速回転する。

高速は次第に音速へ、

音速は即座に光速へ、

光速はやがて神速へ。

頭上で絶え間なく氣合いを放つ、最高の相棒シモンの力を借りてカミナは、

『最初っから、クライマックスで逝かせて貰ひさせ?』

危険な香り漂う口調を、吐いた。

『ていうか、それ、訴えられ……』

『ハーン！？ 訴えられるだあ！！？ こちとら訴訟上等、敗訴覚悟の力ミナ様だあ！！ 文句があんならア！ あの世で訊いてやんゼヒヒヒヒツツツ……！』

今にも泣き出しそうな突つ込みも、最早この男には、通用しない。

振り上げられた鉄拳は天を突いて、

降り下ろされるべき場所へ、ボスウロロの脳天へと、

降り下さる。

『助けるのが間に合わなかつた連中……殺られちまつた奴の分の
ゲンコツだ。多少痛いのは我慢しやがれ

クライマックスだア！――（後書き）

あつからり落とし剪つけてやつたぜ――

…誰だっけ？（前書き）

見覚えが…、

…誰だっけ？

戦いは、カミナとグレン団が合流したことで形勢逆転、あつという間に決着がついた。

グレンラガンの一対のドリルがボスウロロの装甲を掘削し、拳が頭部にめり込んだところで回転力をさらに倍加、ボスウロロを内側から爆散させた。

後に残るのは吹き荒れる黒煙と細かな鉄屑、爆発の熱で地面が焼け焦げた跡だけだ。

敵は倒した。そのことにシモンは安心して、直下のグレンコックピットにいるカミナに話し掛けた。

「間に合って良かつた。大丈夫、アニキ？」

「…」

カミナから応答はない。ん? とはてなを浮かべ、もう一度呼び掛け。

「アーニ? おーい、聴こえてるー?」

「…」

応答、なし。うんともすんとも言わない。

さつきまであんなに元気に喋っていたのにどうしたんだろうか、と不安になる。助けに入る前に結構苦戦していたし、怪我をしているのか。

嫌な予感がしたシモンは、すぐヒグレン側と通信。モニターからグレンの中を覗き見た。

そこに映っていたのは、

「.....」

ボロボロに傷ついて、力を使い果たし、動かなくなってしまった男の、亡骸

…、

「あ…………アーチィィイイッ……」

「んあ？ どした、シモン」

「うわ、ええ？！」

ではなく、普通に返事が戻ってきた。気を失つていただけらしい。

一瞬死んだものと思わせておき、血相を変えて叫んだシモンを一段構えで驚かす。人騒がせなことこの上ないカミナにシモンも一気に脱力、溜め息混じりに口を尖らせた。

「も～、驚かせないでよ。迷子になつたり死んだフリしたり、心臓に悪いって……」

呆れた調子で苦言を呈する。半時前では辛口だったが、やはつカミナのことは心配だった模様。

その弟心を知らない兄貴は、反省もしないで反論。

「バカヤロ、この俺様がそう簡単に死ぬ訳ねえだろー。それと、迷子になつてたのはお前らの方だ！！ おかげでこつちは探し回つてだな！、だからジ、そのお、あれだよ…………」

「アニキ？」

失速して、段々萎んでいく声にシモンは訝る。

まさか、今度こそ体調が優れなくなつたとか…………、

「……腹減つたんだ。なんか、喰わせて」

「……」

ガツクリきた。特に肩辺りに。

まあ、朝にはぐれてもうすぐ夕刻だ。その間何も食べていなければ、それはお腹も空くだらう。

本当はシナチカ村で精一杯のおもてなしを預いてはいたのだが、

そんなことは露知らないシモン、ともかく無事だったことを素直に喜んでおくことにして、無気力カミナを励ました。

「食料ならハウスにあるよ。皆のところに戻ろ」

「……」

返事は、またしてもない。カミナは上の窓でグレンのモーターにか

じつつも、とある物体を凝視している。

「アニキ、聞いてるの？」

「待てシモン、ちょっと…あと少しで思て出せやつ…」

「え？」

シモンも気になつてカミナの見つめる先へ、ラガンの視点を変える。

そこには敵ガンメンが爆破した、ブスブスと火が燃つてゐる真つ黒な場所。特に興味がそそられるような対象は、

「？ 何か動いて、」

燐つて白煙を立ち上らせる黒い物体があつた。細目で見ると、それ

が人の形をしているのがよく判る。

と、ここまでキーワードが出ているなら答えは一つしかない。ガンメンが破壊され、そこに残る動くモノといったら

「アレ、さっきのガンメンに乗つてた獣人か！」

「シャー、死ぬ……とこだつた、シャ……」

ボスウロ口爆破地点。

そんなところで奇跡的に助かり、美味しそうな匂いを薫らせながら泣きじゃくるダシャーは後悔していた。

欲なんか出さず、トラウマなんか気にしないで、恥も外聞もかなく
り捨てて逃げていれば良かつたものを。

結局、先に討たれていた同胞達と同じ末路を辿ってしまった。

グレン団、そしてグレンラガン……、噂に違わぬ強さだった。

どちらかといえば、グレンラガンに敗けたといつよつ、トラウマに
敗けたといった方が的確かも知れないが。

敵に勝つことも、トラウマを克服することも、当初の目的、シナチ
カ村の人間掃討も果たせなかつた。これを不幸と呼ばずになんと呼
ぶのだろう？

なんて嘆いている状況ではなく。

「…………そ、そんなことない、早く、逃げなことね…………」

ダシャーは只今、自身の身を守る術がない。先程までのカミナと立場が入れ替わっている。

い。
グズグズしていればグレン団から一斉攻撃を受けかねない状態だ。
何より、アノ人間に再び襲われるなんて、想像するだけでも恐ろし

追撃してこないとこから鑑みて、恐らくボスウロロの搭乗者が生きていることは知られていないようだし、ここは逃げの一 手…

『あアツツ！？』

「？」

そつは問屋が卸さなかつた。

息を潜めて、這いつくばって岩の陰まで移動しようとするダシャーに、不吉な予感をさせる大声が届けられる。

恐る恐る見てみれば、グレンラガンのグレン部分の顔が、表情豊かに喋っている。

『思い出した……思い出したぞおーー』

『アニキ、何を思い出したの?』

ラガンの顔も搭乗者の意思を反映、不思議そうに聞いた。けれどグレンはその問い合わせには応じず、口部の入口が開いて操縦席から人間が、

そう、ダシャーが最も畏怖する人間が、

グレン団、不撓不屈の鬼リーダー・カミナその人が、

「お前は、あの時の……」

確りヒダシャーを見据えて、それが何者であるのかをよお
く確認して、

一言。

「俺の、肉ウ……ツツツー！」

つ

うん、もつ、良いんじゃないかな、君の肉で。

、

「…………ッてえ、なんでもこじで妥協するんシャー！？ なんでそこ
で田和るんシャー！ 語り部なら、わざとと相~~想~~定しつつシッシャアー！

！—」

抗議された。そんなこと言われても。

とか言つてゐる間に、カミナがグレンを飛び降りて猛然と走つて来ましたよ？

「ヒイイイイー？？」

ズンッとダシャーの前にカミナが立ちはだかる。

顔を極限に近づけて、サングラス越しからダシャーを舐めるように見回す。

その間、ダシャーは蛇に睨まれた蛙ならぬカミナに睨まれた蛇で、ガチガチ歯を鳴らしたまま石化、

見ていてとっても切なくなつてへる蛇をたっぷり見終えたカミナは。

「…お前、獣人だったのか？」

「今更！？ ねえそれ今更！？ 最初の邂逅で気づけるといいわ
シャソニは…！」

素つ頼狂な発言にダシャーが心から突っ込んだ。そりやもう力の限
り突っ込んだ。

それにカミナは反応を示さず、顎に手を当てて一考。

□元から涎を垂らしながら質問する。

「……尻尾は、駄目か？」

「何が？！？ 食べてもいいってことシャア？！ んなもん駄目に
決まってるッシャー！ 何で尻尾なら良いと思つたんシャ、何で尻
尾なら承諾されると思つたんシャア ッツ！？」

ダシャー絶叫。極度の緊張と恐怖で気が触れてしまったのか、もの凄い剣幕で捲し立てる。

しかしカミナは法まない。一いちもそろ限界が来ていた。

一度は逃がし、一度は逃すまいと、にじり寄る。

「わしきつから、肉の焼けた匂いが鼻についてしうがねえんだア
……」託はいらねえ……、喰わせろツツツ
！　！　！」

「え、あの、ちょっと待つて、まだ心の準備が出来て、せめて神に
祈る間を　　ツ」

ガブツ。

.....。

「 終わったの？ 変な叫び声がするんだけど」

グレンハウスの窓から、様子を見に来たリーロンが顔を覗かせた。

家中では船酔いロシウが、ギミーとダリーに気遣われている。

リーロンも多少フラフラで、ハウスの屋根に腰掛けたヨーコ（谷間にブーツのオプション付き）に説明を求める、

「とつぐに終わったわ。敵のガンメンは壊れて、獣人はカミナに追われて食べられかけてる」

氣だるそうに返して、遠目から、カミナがダシャーを追いかける姿と、後ろでシモンの乗るグレン・ラガンが困っている一風景を指差した。

カミナは打撲の痣や擦り傷が目立ち、パツと見て酷く不安にさせられる様を晒している。なのに本人はまるで無視して、元気に走り回っている。

リーダーの変わらぬ息災ぶりに、想定内だとリーロンは頷く。同時に、ヨーロの憂鬱げな、カミナが無事なのにあまり喜んでいない態度を不審そうに見て、

「何よ?」

「いえ、ちょっと違和感感じただけー、」

カミナの方と交互に見合させて、

「嗚呼、ナニコレ」と

ポンと手を打つて察した。

なんだかんだ言いながら、『じゅりゅう』かなり心配していたということを。

密かに持っていたその感情が無用なものだったので、機嫌を損ねているのだと。

殺したつてまず死なないと言い捨てておきながら、敵にやられかけた姿を見て考えを改めたのか、

それとも最初から強がりで、実はロシウヨウ、誰よりも心配していなかったのではないか。

どちらにしても、素直でない彼女の微笑ましい事情を呑み込んだり、
リーロンは、意図せずプッシュと吹いてしまつ。

「…何よ」

刹那、ヨーコから鋭い眼光が飛んだ。

「いえいえ何も～。冷めたフリしてお熱いことね～」

リーロンはニヤニヤしながら茶化して、

「リーロン、貴方なら知ってるわよね。……口は災厄の元つで」

ガチャゴシと膝に置いていたライフルの銃口が、おふざけしている
メカニックをロック・オン。

その頃には、対象の頭はハウスの中に引っ込んだ後だった。

ところでブータは。

「ぶいー…」

谷間に取り残されて、ヨークの沈静なる怒りに氣圧され、震えていた。

…誰だっけ？（後書き）

思い出していくーただいまア

ツツツス！—！

…（食事中）。

え？

「待ちやア

がれえ

! ! !

「い～～やア～～～～シシシ

凶悪なる餓鬼リーダー・カミナと、黒焦げダシャーの果てない追いかけっこは、佳境に差し掛かっていた。

獲物を背中から押し倒して、餓えたケダモノがこんがり風味の鱗へ
と喰らいつく。、

「ギョウ？！ ちょっと待てて本気で千切れ、ジ、あ、ツツツ」

「ヌウ、固く引き締まつた中にも存在する柔らかな歯応え！－味、美味イイイイイイツツ！－！」

「喰われて…ホントに喰われてるウウウ？！？ たたツ、助けてエ
ええツ、助けて下シャアアい！－！－ もつ、もつシャからいません
から、人間様を襲つたりしませんからあ－！？！」

「本当か？」

「はい！ はいいい！」
だから、どうか、許してえ……

「だが断る」

「……あつはは」

そんな一人の、過激に過酷な弱肉強食の世界を観覧する人物は。

食べることに夢中で気づかないカミナを、その名を呼んで振り向かせる。

教えて貰つた彼の名を、呼ぶ。

「カミナー。」

「あう?」

声に、カミナは食事を止めて、脇腹に刺していた歯も抜いた。

痙攣してぐつたり横たえるダシャーは放置して、声のした方へ視線をやり、

「それは、食べない方が良いと思つ」

「シロッケ…」

自分は何処にもいない、 “無人” だと語つた少年を見つけた。

虚空に成り済まして、自身を見失つていた少年が居た。

なんの感情も、なんの色も持たなかつた少年が、

無であることを棄てて、心赴くままに笑つている。

白髪の少年シキロが、そこに在つた。

「…くくつ、ビーしたシロッケ。名前は、じつせ忘れるから覚えないとんじやなかつたつけか？」

カミナの食い意地の悪さを田の辺たりにして、クスクス笑うのを堪えられないシキロに、当人も自然と笑みを溢しながら、意地悪く言う。

忘れるから、覚えない。そう言つたシキロが、初めて自分の名を呼んでくれた。ちゃんと、覚えていてくれた。それだけで嬉しく思つたカミナがいる。

好き勝手に喚き散らした言葉が、叫び倒した屁理屈が、確かに伝わつた証拠だ。

と、カミナの意地悪にシキロは、

「あれだけ何度も名乗られると、嫌でも覚えるよ。後、届いたから」

「ん？」

やはり笑って、首を横に振った。

手を胸に当てる、

これまで失っていた分も含めた、とびっきりの笑顔を見せる。

「届かないはずだったものが、届いたよ、『！」』に。カミナの声が、カミナの言葉が、カミナの、魂が

「お前……」

言葉に誘われるよつに、シキロの後ろから、シナチカ村の無人達も集まっていた。

全員が笑つて、ひたすら笑つて、笑いを振り撒いて、

誰しもが、人形であることを、傀儡として在ることを、やめて。

彼らはもう、無人では、無い。

もう、誰かの為に要ることは、しない。

要るのであれば、それは自分達の為に。

誰に構うことはない。一生に一度しかない自分達の人生を、自分の好きに、生き抜いていく。

それを教えてくれた、シナチカ村の人達を上回る、空前絶後のお馬鹿さんのように。。

「ありがとう、カミナ」

村を代表して、シキロが感謝の意を口にする。

皆が皆、新しい道を手に入れた喜びに溢れながら。

心残りだつた思いを、遺していた末期の想いを、解消させながら。

最期に一言だけ添えて、

ありがとう、僕達を必要としてくれて。僕達を、否定してくれて。
これでよひやく、

『終われる』よ

…。

……“消えた”。

「え？」

シキロも、シナチ力村の人達も、一人残らず全員、

まるで霧か霞が晴れるかの如く、今まで誰も居なかつたかのよ
う、「

消えた。

カミナの畠には、陽が傾いて赤焼ける景色だけが写るのみ。

畠を何度も瞬いても、消えたものが視界に戻つて來る」とはない。

下でダシャーがそそくさと逃げるのも放りっぱなしで、呆然啞然と
するカミナ。そこへ、

「アニキー！」

「…シモン」

グレンラガンから降りて駆けてきたシモンが、謎の答えを運んできてくれた。

「一度良かつた。お前も見てたよな？ 今、」

「アニキ……」

「一体、誰と話していたの？」

「…」

一体、誰と話してたの？

それは、

その質問の意味するところは、

「まさか…」

シモンには、“彼ら”が見えていなかつたところであり、

つまり、

「嘘だろ…………あいつら、まさか…！」

導き出される答えは

！

「あいつら……ツ、透明人間だったのくア

ツツツ！？！」

なんでそうなるのかなあ。

え？（後書き）

さすがは俺様、名推理だ！！

ああー？ 俺の肉が逃げてるーー！

あはよーー

夜になり。

シナチカ村の人達は透明人間だった！ というのが、カミナの結論だったのです。

そんな大馬鹿さんに異を唱えるのは、グレン団メンバーの永遠なる運命なのでしょうね。

「やつぱり……アレ、なのかな？」

深刻そうに、恐々とシモンは尋ねる。

「あ、アレって！？ シモン、滅多なこと言つちゃ駄目よー。 そういう話をするとき、返つて集まつてくるって聞いたことが……」

すっかり青ざめ、気が動転したヨーゴが、シーツと人差し指を口に当てて、

「おー一人共、落ち着いて下さい。幽靈なんている訳

「ハツキリ言わないでえ　　……」「

残念ながら配慮の足らなかつたロシウに、二人の癪癩が爆発。

端から面白半分で眺めていたリーロンも、これには呆れるしかなかつた。

「幽靈なんている訳ないでしきつ？ 理論的に考えなさい、理論的に

「何か、判つたんですか？」

ロシウは隅っこで縮こまるお子様を気遣い、幽霊説を覆せる証言を求める。

先程からまた機械を弄っていたリーロンなら、とっくに原因を究明しているに違いない。そして、

「ここの辺一帯、不思議な磁場が形成されているわ。多分それが、幽霊の正体」

その読みは正しく、縮こまっていたシモンとヨーロッパにも笑みが、

「…ただ、この磁場のエネルギーがなんなのか調べてみたんだけど、どうもガンメンの動力と酷似しているのよね~」

笑みが、

「ガンメンの動力、ですか?」

「そう、ガンメンを動かすには気合いが必要でしょ。非科学的も良いところだけど、もしその気合いが人の心、想う力だとしたら……」

笑みが、リーロンの含みある言葉で凍りつき、

「この不思議な磁場は、ここで亡くなつた人達の怨念…………か・も・知れないわねえ？」

怨念

それ、即ち。

呴

リーロンのいやらしい言い方を境に、一人が堰を切つて泣き叫んだ。

幽靈はいないと黙つたロシウの期待を、ものの見事に裏切つたよこの人は。

「う、リーロンさん……」

「ウツフ だつて、二人の怖がる姿が可愛かつたんでもの~」

反省も、していなかつた。

といひでカミナとギミダリは、

「ムシャムシャ……むう、ほこはがひてもひやはらねえ! やられひはつたやふもひれいはつはり……「クンツ、だ! 墓作りくら

い手伝つてやりたかったのによお、あいつら、実はかなりの照れ屋
だつたのかもな？」

またしても獲物に逃げられたので、グレンハウスに貯蔵してあつた
乾燥骨付き肉を代わりとして頬張りながら、

「すつからかん！」

「待つて…」

探険ごつこと称してついてきた双子と一緒に、シナチカ村の様子を
見に行つていた。

因みに頬張つていた時の台詞を翻訳すると、

「むう、何処探しでもいやがらねえ。殺られちまつた奴もキレイサ
ッパリだ！」

となる。

結局収穫が得られなかつた三人は、満天の星空の下を帰宅。ロシウにお帰りなさいと出迎えられ、

「やつと歸つてくれました。さあ、傷の手当をしましょっ。」

「ああん？ こんなもん、睡つけときやあ治るよ。なんたつて俺は！
絶対無敵のカミナ様だからな！！」

「敵にやられかけてたのは何処のどこつよ……」

「破傷風になつても知らないわよ～」

「刃掌、封？ なんだ、ちょっとびりカツコいじやねえか。是非ともなつてやるうじやあねえのオ！？」

「馬鹿だ…」

献身的な申し入れを、お間抜け回答で無下にしたつ。

いつも通りの日常風景に戻ったといひうで、シモンとピーノの弱腰モンビが、声を揃えて直訴する。

「「早くから離れようよ」」

「えー？ 俺もうへたくだしよ、グレン動かしたくねえ」

「だったらグレン・ラガンのままで俺が動かすよ！ いへりでも氣合い入れるよー？」

「ねえ、私もじぱりここに残つて磁場を調べたいわ。今後必ず役

に立ちやうじやない」

「駄目ー！ 駄目なものは駄目なのよー！ リーロンだけ置いてつ
ちやうわよー？」

難色を示すカミナとリーロンを押さえつけて、有無を言わせず出立
決定。

渋々ながらも折れるしかなかつたカミナは、見納めとして、もう一度だけシナチカ村の方角を向いた。

岩の陰で見えない洞穴を想像し、誰からも必要とされなかつた、要
無しの村を思い浮かべて、

「…まあ、あんだけ良いツラ出来るよくなつたんだ。もつとやかく
言わなくても大丈夫だろ」

消滅寸前の、皆の笑顔を思い出してフツと笑う。シナチカ村の透明

人間達は、シキロは、きっと一度と自分達は必要のない人間だ……なんてことは、言わないだろ？。

カミナにしてやれることは、なくなった。

ならば、男は黙って彼の地を去るのみ。

別れの一言くらい交わしたかったが、隠れられたままでは叶わないし時間もないので、

自身を待つ仲間達へと、共に歩き出す。

その途中へ、

バイバイ、カミナ。

「 「 … 」 」

「 キリ、ダリー、ハウスに入りなさい 」

「 … たくさん、いる 」

「 え? 」

「 みんな、てをふつてゐる 」

「「バイバイって、わらってる」」

「…、」

振り向いても、誰も、いなかつた。

空耳だったのか、風の音を聞き違えたのか、

でもその声は、確かにカミナの耳に届いた。

幻聴だらうと、まやかしだらうと、

透明だらうと、幽霊だらうと。

あれは確実にシキロの声だと、少年の別れの挨拶を聞いたのだと、
カミナはハッキリ決めつける。

だから、カミナも返すことにしてた。

束の間の交流、一時の邂逅に過ぎなくとも、

彼らは彼処に存在した。カミナの前に、在ったのだ。

だから、応えた。

息を肺の中一杯に吸い込んで、

彼らに負けない、最強最高の笑顔で、

さよならを、言つ。

「あばよ、シナチカ村！…あばよ、シロッケ！…
時は、飯をたらふく用意しどけよオ！…」 次に会つた

…。

「…………カミナア

に？！」

！？？ 誰に話しかけてんのよー 誰

「アニキ、気をしつかり持つてーー！」

「バイバイ！」

「バイバイ

「ギャハーーとダニーーまで…」

「アーニキのせーだ……アーニキのせーでギリーピダリーが呪われた！」

「憑くならアーティに取り憑いてよおー……こんな幼い子を呪うなんて
……アアア……」

「…ラシッ」

「コーロンちゃん、笑つてないで止めるのに協力して下やこ」

「アーティロシカー……ロシウも憑こー！」

「え……ええー？ 僕ですか！？？」

「化けて出るつて言つたじやんー！」

「言いましたけど、本氣で言つた訳では……」

「やついえば、ロシウが冗談を言つなんて珍しい話よねえ。……」
ちも呪われていたりして、ねえ？」

「……………ロオオシイイウウウウ
？？？！？」

「だあもつー！ つか、オメヒーらウルツツセヒ
ツツツ！……」

「アンタには負けるわよ」

「アニキには勝てないよ」

「カミナさんの方が、大きいです」

「以つ下同文」

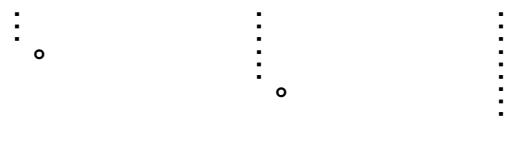
「こつがどーがんー」

「ふん」

「ふみー」

「ホホ……お前りな……ッシ」

「…………シ、…………ー？…………ー…………」



『次に会った時は、か

『それはちょっと、無理なんだけどね

『僕達は、やつらでいるか、い』

『もうすぐ、本当に消えるから』

『けど、だけれど、カミナ』

『なんでかな……カミナなら、また会えるような気がするよ』

『たとえシンでも、肉体は無くなつても』

『カミナは、それすらどうにかしてしまつ、そんな気がする』

『不撓不屈の、男だからね。だから』

『また、会おう』

『バイバイ、カミナ。また、逢おうね』

あやまつ（後書き）

まだまだ続くぞコトヤロオ――――――

俺を誰だと思つてやがぬか……（前書き）

とくべと見ぬせ……

俺を誰だと思ってやがるか！――！

夜が明ける。

太陽が昇り、世界を跨ぎ、行き着いたなら、落ち沈み。

光が消えれば、また夜へ。

何度も、何度も、繰り返される自然の摂理。

昇り沈む太陽が在る限り、それを展望する地球と生き物が在る限り。

無限に拡がる大宇宙が在る限り、

『螺旋』の道みは、終わらない。

青空に浮かぶ灼熱の星が、見渡す限りの荒野の世界を、チリチリに焦がす時分。

草木もろくに生えない、黄土に濁つた無味乾燥の大地の上で、

人っ子一人見当たらず、寂しくて心切なくなつてくるそんな場所で

、

けたたましい雄叫びを上げながら、寂しさなんて何処吹く風で爆走する紅いガンメンの姿があつた。

その名もズバリ、グレンラガン。

漢の魂背中に背負い、ついでにグレンハウスも背中に背負つて、猪突猛進ながらに荒野を颯爽と駆け抜けていく。

エネルギー溢れる豪快な走りは、誰にも止めることは出来ない。

誰にも、

「コカラア ッ!! 止まつたさいの馬鹿力ミナーハ
つまで走り続けるつもりよ!!」

グレンハウスに閉じ込められたヨーロッパも、

「ちょっとカミナーリー グレンの方で調べたことがあるって書いてあるでしょ？！ とにかく一度止まりなさい……」

通信機越しに直接訴えるヨーロンでも、

「……数日、夜通し走りっぱなしです。食事も取っていませんし、それに、僕、もう限か……」

船酔いでフランクは勿論のこと、

「お～、セビギビコンビコンとんで～～～～～」

「はやーー」

まつたりギミーとダリーは論外で、

『だ、駄目だ……グレンのコントロールを奪えない。アニキイ、
止まってくれよおーーー!』

「ふいふいーーー! ふうふふ、ふいーー?」

頼みの綱のシモン。ブータすら、ラガンの中でお手上げ。

気苦労絶えないグレン団メンバーその全員が、決死の説得を行う中、

馬鹿の一つ覚えでグレンラガンを走らせる、前人未踏の超馬鹿リー
ダーは。

『いつまで走り続けるかって?ー? んなもん決まってんだろオ!』

！
地平線の果てまでだアツ――――

「一生辿り着けないわよ！」のお馬鹿

ツツ！！

『調べたきや調べなあ！！！
ただアし、俺ア今忙しいから、そつか
ら頑張つて調べろオ！！！』

「それが出来ないから頼んでるんでしょ！？」「

『 デコ助手、心配してくれてありがとうよ!! けどな、食料はグレンにたんまり積んどいたから、ノオープロプレイイムツツツ 』

「そ、そです、か。それは、良かつ
……パタリ」

『スイ モオン！！！ 諦めんじゃねえ！！ 漢なら、果てないユートピアを田エ指すソドウアアアアアアアアアツツツ！-？』

「意味判らないよオオオオオオーーーー！」

「ふいいいいいいいいいいいい？？！」

…。

と、まあ、そんな具合で。

グレン団メンバーが迷子になつたことで、旅の足が停滞

「迷子になつたのはカミナの方ーーーー。」

嘘みつかないで。

…旅の足が停滞し、遅れを取り戻そつと躍起になつてダッシュして

いの、と、う光景なのですが。

絶え間なく揺さぶられることが数日間。仲間達は止まってくれと懇願するも、カミナは依然として走り行く。

止まれば死んでしまつ魚のよつこ、

爽快な汗を流しながら、明日へ向かって突き進む。

そもそもこの男の辞書に、『立ち止まる』という文字はないのだ。

一時停止も、機能停止も、完全停止も有り得ない。

肉体が朽ち滅びようと、その信念が亡びることは、決してない。

脈々と、受け継がれていく。

幽霊の村が存在した証が、カミナの心に残るよ。」

カミナの遺志も、後世に受け継がれていく。

立ち止まつたりしない。挫折もない。転んで倒れたなら、また起き上がれば良い。

それが、この男だ。

無茶で無謀で無鉄砲、滅茶苦茶ながらに向こう見ず　　しかし、決める時は決めてくれる。竦んだ心を奮い起たせ、希望の炎を燃え上がらせる！

それがこの漢　　…、不撓不屈の、鬼リーダー！！

「おつよ、俺を誰だと思つていやがるッ！！ いつでも何処でも全
力前進、後退なんぞ有り得ねえ！！ 無茶を通して道理を蹴つ飛ば
すウツ、不撓不屈のオ！ あ、鬼リーダー……」

「……グレン団のカミナ様たあ、オ俺のことだア
ツツツ！……」

— 7 —

一先ず、止まらないかい？

「却下！」

彼らの旅は、まだまだ続く…。

}Fin{

俺を誰だと想つてがせんか……（後書き）

あはよ、オメーラー、また逢おうぜ……

カットされるたあ、思わなかつた…（前書き）

訴えられる…？ 上等だあ…！

カットされるたあ、思わなかつた…

「」では、諸事情により本作品から除外した会話や会話なんかを書きたいと思います。

ではでは、レッジラゴー。

テイク1

カミナとダシャーの追いかけっこでの会話。

「…喰らえッシャア！ スネイクバイトオ！…！」

「く……某奪還屋漫画から苦情がきたうな技名つけやがってッ」

……本当にきたうなので、NG。

てか、元ネタ知ってる人も少ないだろ。

テイク2

その一。

「アイアンティイイイツル！…！」

「ふん、効かねえなア…………任〇堂に怒られそつた技なんざ、効く
かよオ！…！」

本当に怒られそつたので、NG。

余談ですが、最近懐かしくなつてプラチナ買いました。やつぱり良
いな、poke m。

カ///ナとハサロの出番です。

「ハハ。俺の、肉……」

「……あの」

「んあ？」

「……女じや、ないのかあ……」

あつたりだし、萌えばかり詰め込んでねえ。てことで、NG。

つーか、シキロに謝れ？

テイク4

カミナが迷子の頃、グレン団は。

「アニキ、見つからないね」

「見つからないわね、あの馬鹿は」

「わい、捜すのやめましょうか?」

「賛成の人、手を挙げてー?」

「はい

「はい

「ふーい

また本編に繋がらなくなるから、NG。

……それも一興か？

「不穏な動き見せてんじゃねえよ」

メンハ、メンハ。

潰れた村が健在といつ設定で、本氣で出来つと画策しました。

テイク5

「あー、我が村へ何しに来ましたかあ？」

「な……シャク村長！？ なんでテメーが！」

「誰だ、それは？」ワシの如きは『シャクモキド』だが

「……氣に入らねえ」

「奇遇だな、ワシもゞいとも前が好かん」

因縁の対決、再び？
でも無駄に話が長くなりそうだったので、N

しておけば良かつたと、後悔。

あれ、ブータがいないよ？

「ダメだ、シロッケ達何処にもいやがらねえ

「あ、アニキお帰り。お腹は膨れた？」

「おお、チビウシノクビ驗つたから、もうひもじへねえよ

「うひか。それじや、出できて見て見て、ブータ」

「ふみ

「？ いつも思つてたんだがよ、なんで俺が腹ア空かせつと、ブータ隠すんだ？」

「それは…………一色々、あるんだよ。色々……」

「ふ…………ふいふい、ふふいふ…………？」

「なんでそんな必死なんだ？」

仲間を一人（一匹）喪う危険性があるからです。てな訳でもないですが、NG。

カットした理由については、予定より話の尺が長くなり、短縮を図った為。

以上、カットした六つでした。他にもまだあります、微々たるものなので割愛させて頂きます。

カットされるたあ、思わなかつた…（後書き）

アノ肉が食べたい…。

□記書くたあ、ナマイキな!!（前書き）

久しぶりに読み返そうかシャー。

口記書くたあ、ナマイキな！！

月×日 晴れ

本日より、王都テッペリンよりチミルフ様の元に配属されることになった。まだまだ駆け出しだが、頑張って人間共を掃除して、一人前になろう。目指すは部隊長クラスだ！

月 日 晴れ

今日はチミルフ様と非番の者達とで狩りに出掛けた。俺もなかなかの量を仕留めたが、一番数多かったのはヴィラル様だ。チミルフ様にも褒められて、悔しかつた。次は負けない。

狩りを終えたらそのままキャンプ、仕留めた獲物でバーべキューだ。トビタヌキのステーキは絶品。チミルフ様は部下に優しい、ここに配属されて良かったとつくづく思う。これがアディーネ様とシトマンドラ様なら…。

月 日 晴れ

季節も移り変わり、冬が来た。蛇の身としてはキツいのだが、そんなことを吹き飛ばす嬉しい出来事があった。なんと、人間掃討数が好成績だということで、専用ガンメンを与えて貰つたのだ！チミルフ様にも『この調子なら、部隊長昇進も早いぞ』と太鼓判を押して貰つた。喜びのあまり飛び跳ねて転けて、壁に頭をぶつけた。

痛みは気にならなかつた。

月 日 曇りのち雨

本日、新たに掃討担当区域の変更手続きが行われた。なんでも、そこを担当する奴がノイローゼになつたとかで、代わりに最近好評価を受けて調子の良い俺に任せたいと、チミルフ様直々にご指名されてきた。

これを断る理由はないと、すぐ返事を出した。前の担当者がなんでもノイローゼになつたのかは、本人が喋らないので判らなかつたが、そこを俺が制圧してみせれば、部隊長昇進は確実だ。この日の夜は、興奮して寝つけないぜ！

月×日 晴れ

本日、新しい担当区域に出向いて人間達を掃除してきた。

地上にあつた村は一つ、他には地下が崩れて潰れた村を二つ見つけた。報告書にもあつた、前担当者が潰したに違ひない。おのれ、獲物が減つた。

見つけた村は小さく、住んでいる人間もそんなに数はいなかつた。掃除するのに時間も掛からなくて拍子抜けした。前の奴はどうしてノイローゼになつたのか？

一つだけ気になつたのは、その村の人間は誰も逃げず、抵抗もしなかつたことだが、その分楽が出来たので良しとする。

月 日 曇り

新たに村が出来たと報告が入り、向かつた。そこは以前殲滅した村があつた場所で、誰一人歯向かつて来なかつたことで覚えていた。あそこには他にも地下の村があつたのか、とにかく点数稼ぎに漬そうと行つてみたら、

月×日

月 日

月 日

×月×日

×月×日 晴れ

久しぶりに日記を書こうと思つ。今日起こつたことを未来永劫忘れぬ為に、ここに刻むことにする。

本日も、もう何度目になるのか、件の村の殲滅に向かつた。何度も潰しても、次には元通りになる、氣味の悪い村だ。

今回はその原因を探る為、村人の一人を捕まえようとした。死人みたいに抵抗しないのでまた気持ち悪かつたが、背に腹は変えられない。こんな日がこれ以上続いたら、俺までノイローゼになってしまう。その時、

悪魔がやつてきた。『カミナ』と名乗る悪魔が。いきなり後ろから俺に覆い被さつて、左の二の腕を、食

\$ £ ¥ @ *

¢

% #

落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け
着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け
落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け

村人を捕まえるのは、失敗した。

仕方なく、いつも通り攻めることにした。繰り返しになると判つて
いても、そうする他なく、

そうしたら、また、アイツ

ダイガソザンへかえると、さっそくチミルフさまのところへいった。
すいませんと。ひとつことあやまつてつべりんにイドウさせテモラ
つ、

テッペリンに異動し、グアーム様の下で働くようになつてから数週間後。

『悪魔』率いるグレン団とダイガソザンが激突、チミルフ様が敗れたとの一報が舞い込んだ。

四天王の一角が墜ちたことで、他の四天王の方々も螺旋王様に呼び出された。グレン団を駆逐すべく、動き出すらしい。

それより重大なのは、チミルフ様が亡くなられたということだ。ダイガソザンを去る前、チミルフ様は自分の壊された専用ガンメンを新たに与えて下さり、良く頑張つたと労つてくれた。まさか、それが形見の品になるなんて…。

部下思いのチミルフ様の仇を取ろうと、ヴィラル様も含め、皆躍起になっている。俺もチミルフ様にはお世話に、それ以上に迷惑をお掛けしたし、弔い合戦に参加したかったのだが

俺は、悪魔の影に打ち勝てぬ自分を、呪つた。

すみません、チミルフ様。

月×日 晴れ

昔が懐かしい。数年前のこの日は、まだ村の悪夢に悩むことも、『悪魔』に日々恐れることも知らなかつた。

嗚呼、懐かしい。

月 日 曇り

アディーネ様が撃退されてから数日後、代わってグアーム様がグレン団討伐に向かわれた。俺は、

風邪を引いたと嘘をついて、テッペリンの護衛として残った。

月 日 晴れ

アディーネ様が亡くなられた。

チミルフ様と仲が良く、誰よりチミルフ様の死を嘆いていたあの方
が、『悪魔』に殺されてしまった。

普段性格がキツく、部下を苛めるのが趣味で嫌われがちだったアディーネ様。それでもチミルフ様を想い、敵討ちにグレン団へと立ち向かわれた。

胸が痛くなつた。アディーネ様に比べ、自分はどうだ？　『悪魔』
が恐ろしくて王都を出られない我が身が恨めしい。
ほんの一握り、俺にも勇気があれば。

月 日 晴れ

シトマンドラ様がご出陣なされた。空戦隊による爆撃でグレン団を追い詰めたらしが、なんとヴィラル様の妨害でダイガンテンが故障、トビダマも一つ奪われてしまつたらしき。

チミルフ様とアディーネ様、お一方の為に戦つていたヴィラル様が、何故そんなことをしたのか、判らない。

そしてついに、グレン団が王都テッペリンに攻め込んでくる。今まで逃げていた俺に、もう逃げ場はない。戦わねば、いけない。決心しなければ。

月 日

来た。来た。来た来た来た来た來た來た、悪魔がグレンが攻めていかないとシトマンドラが飛んで駄目だかんどねわ急がいややこんな恐て書いてむ場合

月 日 晴れ

あれから何日経つただろうか。

大グレン団（名前いつの間にか変わつてた）の侵攻によるテッペリン防衛戦は、大グレン団の勝利に終わった。シトマンドラ様も、グアーム様も、螺旋王様すらもグレンラガンに敗れ、地上は人間達のものになつてしまつた。それより俺にとつて衝撃だつたのは、『悪魔』カミナが死んでいたということ。

チミルフ様との戦いの後、すぐに亡くなつたということ。

逃げなくとも、良かつた。

人間達が新たに立ち上げた新政府につくことは勿論、敵前逃亡したために反政府勢力、獣人残党軍にも入ることが出来ない。何処にも、俺の居場所はなくなつてしまつた。

この日記も、今日限りで書くのをやめにしよう。ならず者として生きなければならない俺に、日記を書き続けるのは辛いだけだ。機会があれば、何処かへ捨てよう。

「これで、終わりにする。

」・」・」・」・」・」

「……………ぐあり、ヒツ……………何度……………読み返しても……………泣けるンヤ～」

「あ？ 何泣いてんだ、お前」

「うん、ちょっと日記読み返して……………ひわお？！ な、なんだシ
ヤ～、ガメルか。驚かすシャ…」

「また例の悪魔つて奴と間違えたのかよ」

「あ～、似てんのは格好だけだシャ。お前はアレほど怖くはないシヤア。んで、なんの用つシャ」

「おお、襲うのに手頃なところを見つけたぞ。コレハナ島つて離れ小島だ。カミナシティからかなり離れてるから、政府のアホ共もいねえ。そこで食糧をたんまり奪つて、月が落ちてきても大丈夫な場所に隠れるぞ」

「やつだシャ～、シェルターに行けば犯罪者でとつ捕まるし。それならさうさと…ウヒイ！」

「ん？ なんだよ」

「な……なんでもないシャ。先、行ってくれつシャア…」

「変な野郎だな。ま、いいわ。はよ来いよ~」

「…………昔噛まれた古傷が疼くなんて、不吉シヤ…………なんか、嫌な予感がするシャ~。大丈夫かシヤ……?」

「急げよおーー!」

「わあかつてるッシャー!! つたく、人の気も知らんで……

「あーあ、何処まで落ちぶれりやあ良いんだかシヤ~…………ならず者として生きるのにも疲れたシャ。かといって、月に押し潰されてあの世に逝くのもシャ~、嫌だし……」

「…」

「…もし。もし、あの悪魔が生きていたら、」

「あの月、ジーにか出来たんかシャア？ 不撓不屈の鬼リーダー、」

「あの、カミナなら」

} Fin }

口呪書くたあ、ナマイキな！（後書き）

（コレハナ島襲撃後）

「シャハ～ツ、予感が的中したシャ…………」

「畜生……あんな女に負けるなんて……」

「「いやそれぞまさしく、やぶ蛇。ガクリ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779f/>

天元突破グレンラガン番外編 第5.55話「前を向いて生きやがれ！」

2010年10月9日13時30分発行